

---

# アヤカシ荘の人々。

須賀 隆太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アヤカシ荘の人々。

### 【Nコード】

N3334B

### 【作者名】

須賀 隆太郎

### 【あらすじ】

大学で一人暮らしを始める主人公が選んだ家賃1万5千円のアパートは妖怪だらけだった！？大学生と妖怪が繰り広げるとたばたス  
トリー！

## 第1話：はじまり

「ここが、オレの新しい家か……」

とある街のとあるアパートの前で一人の青年が大きな荷物を引きずりながらつぶやく。

彼の名は北方きたかた 裕也ゆうや。この春大学に合格したことで地方から上京し、ここにあるアパート『流星荘りゅうせいそう』で一人暮らしを始めることになった青年である。

「しかし、こんな立地条件よくてなおかつ見た目もきれいなのに家賃15000円つてずいぶん安いな……でも、オレみたいなピンボ―学生には強い味方だな。でも、この入居者募集の条件が気になるな……」

裕也がそうつぶやいたとおり、このアパートの入居者募集の広告には、【1・男性 2・体力に自信のある方 3・少々のことには動じない方】と書いてあったのだ。

「まあ、わからないものを考えても仕方ないな。さて、荷物を整理しないといけないし、オレの部屋は203号室だったな。」  
裕也は考えるのをやめ、階段を上がって部屋に入ってしまった。

立地条件がいいと裕也が言っていたが、それは別に駅に近いとかそういうことではなく、目と鼻の先というか、すぐ隣が裕也の通う大学のキャンパスなのである。とはいえ駅までもそう遠くはなく、自転車を使えば10分程度でつくようなエリアにこの流星荘はあった。

「ふう、まあざつとこんなもんかな。おっと、ご近所さんに挨拶くらい行っておかないとな。母さんもそういうところはきちんとしてみたいなこと言ってたし。」

ある程度の片づけを済ませたところで裕也は親から渡されたご挨拶

掬の品をもって部屋を出るのだった。

## 第1話：はじまり（後書き）

果たしてこの先彼をどんな展開が待ち受けているのか？

また、遅ればせながらネット小説ランキング（現代コミカル部門）に登録しました。

投票などしていただけたら幸いです。

## 第2話・出会い（前書き）

1話に比べると相当長いです。ざっと5倍か6倍はあるでしょう。）  
笑

## 第2話・出会い

「えーっと、オレの部屋以外の5部屋のうち201号室以外の4部屋が埋まっているようだし、片っ端からたずねていこうかなって。」  
裕也は部屋を出ると階段を下りて1階へ向かった。

101号室

「ごめんくださいーい」

裕也が101号室の白崎しほみき 雪子ゆきこと表札の出ているドアチャイムを鳴らす。

「どちらさま〜?」

「今日ここに引っ越してきた北方と申します、引越しのご挨拶に来ました。」

「はい、今開けますね〜」

との言葉どおり、ドアが開けられると、まぶしいほどの白い服を着た女性がいた。

「どうも、上の203号室に引っ越してきた北方 裕也です。これからよろしく願いますね。」

裕也がそう挨拶してご挨拶の品を渡す、とそこで裕也は妙なことに気づく。

「あの一瞬間で失礼ですが、冷房ガンガンに効かせてるようですけど、寒くないのですか?」

裕也が部屋から漏れてくる冷たい空気に身震いしながらそうたずねると、

「ええ、まあ……すみませんが忙しいのでこれにて失礼しますね。」

雪子はそう言うとドアを閉めてしまった。

裕也は目的も達成したので立ち去ったが、その直後に部屋の中で、  
(あの人、ただの人間……?こここの連中の中で無事に生活できるかしら……?)

雪子がそつつぶやいたのを裕也は知る由もなかった。

### 102号室

次に102号室の石崎 薫と表札が出た部屋へ。しかしチャイムを鳴らしても留守だったようで誰も出てこなかった。

### 103号室

そのまま隣の103号室へ。ここには真崎 麻美と表札が出ていた。ドアチャイムを鳴らそうとしたら、中で何かぐつぐつ煮込んでいるような音が聞こえた。

(どうやらここはいるようだな。)

裕也はチャイムを鳴らした。

「はい」

ドアはすぐに開いた。出てきたのは黒いジャージの上下を着た、見た目小中学生かと思うような少女だった。

「……あ、今日この上の203号室に引越してきた北方です。引越しのご挨拶に来たので、よかつたらこれどうぞ、とご両親に伝えてください。」

裕也は少女の見た目から親がいると判断してそう言ったのだが、「いえ、私は一人暮らしですよ。あなた、見た目で判断しましたね？こつ見えても私、25歳なんですよ？」

麻美は少し怒ったようににらみながら裕也に告げる。

「に、25歳！？ずいぶん若く見えるんですね。いや、ごめんなさい。では、オレはこれで。」

裕也は麻美の射るような視線のプレッシャーに耐え切れず、そそくさと立ち去り、階段を上がっていった。

### 201号室

空き部屋なので通過。

## 202号室

続いて202号室へ。そこには盛野<sup>もりの</sup> 彩<sup>あや</sup>と表札がでていた。裕也がチャイムを鳴らすと、

「あーい、今開けますよーっと。」

中からそんな声が聞こえてきたかと思うと、ドアが少し乱暴に開いた。出てきたのは、男の裕也から見たらかなりのナイスバディの女性だった。

「あ、今日隣の203号室に引っ越してきた北方です。ご挨拶に来たので、これ、よかつたらどうぞ。」

裕也がそう言っつて物を渡すと、

「ああ、よろしくな。それにしてもアンタ、これから大変かもな。」

彩がそう裕也に言っつと、

「それはいったいどういう意味ですか？」

裕也がまったくわからないという風に首をかしげる。

「ここの住民はアンタ以外みんな女性だ。ちよいとした事情があつて男の入居者を募集してたところにアンタが来たつて訳なんだが……ところで今夜はヒマか？」

彩が何か言いかけたところで思い直したかのように話題を変える。

「ええ、大丈夫ですよ。まだこっちに出てきたばかりでどこに何があるかもわからないので。」

裕也がそう答えると、

「それじゃ、今夜はアンタの歓迎会だな。他の部屋のヤツもみんな誘つて今夜8時にお前の部屋に行くから待つてろよ。それじゃあ、早速準備を始めないとな。」

彩はそう言っつと一度ドアを閉め、すぐに着替えて飛び出していった。

裕也は部屋に戻つたあと、他の部屋のみんなを迎え入れられるよ

うに片づけを続けていた。

そして夜8時になった。その直後、裕也の部屋のチャイムが鳴った。

「はい。」

「あたしだ、みんな連れてきたぞー。」

「わかりました、今開けますね。」

裕也がドアを開けると、雪子はいいかわらずまぶしいほどの白い服、麻美は黒いジャージの上からさらに黒いコートを着ていた。彩はそのナイスボディを存分に見せ付けるかのようなセクシーな服、そしてもう一人他の3人に比べると地味な服の女性が最後に続いていた。

「えっと、あなたは……石崎さん？」

裕也が最後に入ってきた地味な服の女性にたずねると、小さな声で「はい」とだけ返ってきた。

「昼間、挨拶に行ったら留守だったようで……これ、ご挨拶ですよ。よかったらどうぞ。」

裕也がそう言って他のみんなに渡したものと同じものを渡す。

「あ、これはどうもご丁寧に……」

薫はそう相変わらず小さな声で言うと、ぺこぺこ頭をさげ、裕也もつられてぺこぺこする。

「それじゃ、新しい入居者に、乾杯！」

彩が買ってきた大量の酒で乾杯をし、5人は飲み始めた。

しばらく飲んでいると、あまり飲みなれていない裕也は酔いが回ってきた。と、

「あーそうだ裕也。おめえに話しておかないといけないことがあるんだけど、いいか？」

彩が突然まじめな顔をして裕也に話しかける。

「ほえ？なんですか？」

裕也はかろうじてろれつが回っているくらいの状態で聞き返す。

「あのな、実はあたしたちみんな、普通の人間じゃないんだ。いわゆる『妖怪』ってやつだな。」

彩がそう言うのと、

「またまた〜今日はエイプリルフルじゃないですよ〜?」

裕也が信じてない口ぶりで笑い飛ばす。

「ま、信じないのも無理は無いか。雪子、麻美、薫。証拠見せてやろうぜ。」

彩がそう3人に言うと、彩も含めて4人の体が光に包まれた。

光が収まると、雪子は白い洋服が和服 着物に変わり、部屋の温度が一気に下がった。麻美は服装は変わってないが、手に何か杖のようなものを持っている。薫も服装は変わらないものの、髪型がそれまでのお下げからよくわからないもじゃもじゃしているものに変化していた。そして彩は、さらにセクシーさの増した見た目的には15歳未満お断りな格好になっていた。

「い、いったいこれは……………」

裕也が一発で酔いがさめたかのようにあわてて後ずさりする。

「まあ、見ての通りだ。雪子はそのまんま雪女、薫はゴーゴンとかメデューサとか言われる妖怪、麻美は妖怪とはちよつと違うがいわゆる魔女、<sup>ウィッチ</sup>そしてあたしは男の精気を吸い取るサキュバスってやつだ。こんなあたしたちが住んでるから、一応ここには『流星荘』っていう名前がついてるけど、通称は『アヤカシ荘』って呼んでるんだ。裕也が会った大家は名目上のもので、実質取り仕切っているのはあたしなんだ。」

彩がそう説明する。

「はあ……………ところで昼間言っていた、男の入居者を募集するって言うのはどういう意味なんですか?女性ばかりで下着ドロとかが不安なのかもと思ったけどみなさんならそんな心配は無用でしょうし……………」

裕也がもはや納得するしかないという感じで頷いたあと、彩が昼

間言つてたことを思い出し、たずねてみた。

「え？ああ、そのことね。ああ、たしかに下着ドロとかの心配は無用だな。なにかあったら自分たちで制裁加えちゃえばいいんだからまあ、男の同居者をわざわざ募集したのはだな、あたしらが退屈だったからなんだ。不特定多数の一般人にところかまわず能力を暴走させるわけにはいかないだろ？どうしてもストレスがたまるんだよな。そこでタフそんな男の出番<sup>アシタ</sup>ってことだ。」

彩がそう言った後、他の3人に目配せをして裕也にゆっくりと近づいてくる。

「え？え？ちよ、まさか……」

裕也も後ずさり逃げようとするが、すぐに壁にぶち当たってしまった。

「死なない程度にやるから、おとなしくしてなさい！」

4人はそう言うのと、まず麻美が裕也の動きを止め、続けざまに雪子が息を吹きかけ裕也の足を凍らせた。すでに身動きがとれず震えるばかりの裕也に対し、次は薫がゆっくり歩み寄ると、目をカツと見開いた。その瞬間、裕也は首から下の右半身に違和感を感じて首を動かしてみると、その部分が石になっていた。あまりの状況に裕也が絶句していると、彩が麻美になにか耳打ちし、麻美がちよちよいと杖を振り回すと、石になってた部分、凍っていた部分も全て元通りになった。

「た、助かった……」

裕也がほっとしたのもつかの間、

「まだ終わってないわ。あたしのストレス発散が済んでないのよ。ただ、凍ってたり石になってたりしているとあたしの能力発動に支障が出るから解いてもらったの。」

彩が裕也にそう言ったあと、にやりと笑い、座り込んでいる裕也を手招きした。

「？」

裕也はわけがわからないのと、疲労で体が動かないのもあって座

り込んだままでいようとしたのだが……

「!?!」

彼の意思に反して身体はゆっくりと立ち上がり彩のほうへ歩き出していた。やがて彩の目の前で止まった直後、彩は思いっきり裕也を抱きしめた。

「ちょ、彩さん、む、胸があた……って……あれ？」

裕也は最後まで言い切ることなく気を失った。

「う……」

しばらくして裕也が目を覚ますと、麻美がひざまくらをしてきていることに気づいた。

「あ、気がついたみたいですね。ちょっとやりすぎたみたいです。久しぶりのストレス発散だったから加減が利かなくて……それで、私がひざまくらをしているのは、他の3人だと能力が発動しちゃって危険なんです。雪子さんは触れたらあつという間に凍りますし、薫さんの場合は今度は全身石になりますし、彩さんは精気根こそぎ持ってかれますので注意してください。」

麻美がそう言って謝り、自分がひざまくらをしている理由まで話してくれた。

「まあ、こうして生きてるし、今回は仕方ないということにしておきましょう。家賃の安さを基準に決めたオレもオレです。でも、今後はほどほどにしてくださいね。オレは体の丈夫さには自信があるとはいえ今日のはかなりしんどかったから……」

裕也は起き上がりながらそう言った。

「ま、なんにせよだ。裕也、『ようこそアヤカシ荘へ!』」

## 第2話：出会い（後書き）

かなり危険なアパートに入居してしまった裕也の明日はどっちだ！？

### キャラ紹介

・北方 裕也きたかた ゆうや：主人公。18歳。大学入学を機に上京し、流星荘（アヤカシ荘）へやってくる。190cm、75kgと恵まれた体格で、体の丈夫さだけがとりえ。また、心臓に毛が生えていると言われるくらい、少々のことでは動じない。

・白崎 雪子しろはらき ゆきこ：アヤカシ荘101号室の住人。雪女。人間の年齢で23歳。それ以外にこれといった特徴はない。

・石崎 薫いしざき かほる：アヤカシ荘102号室の住人。ゴーゴンorメデューサと呼ばれる妖怪。人間の年齢で22歳。普段は非常におとなしく、話し声も耳を澄まさないと言えぬほど。ただし一度怒らせたら怖い。

・真崎 麻美まなき あさみ：アヤカシ荘103号室の住人。魔女ウィッチ。人間の年齢で25歳。厳密に言えば妖怪とは違うが誰も気にしていない。この妖怪たちの中では一番のいたずら好きで、通行人に魔法でいたずらを仕掛けて楽しんだりしている。あまり害はないので他の住人たちもほったらかしにしている節がある。

・盛野 彩もりの あや：アヤカシ荘202号室の住人。サキュバス。人間の年齢で26歳。裕也たち男から見たらかなりのナイスバディで、よく街でナンパされる。ナンパした男の末路は想像に任せるということで、ノーコメントらしい。

主要キャラはこんなものですね。今後新キャラが出てきたらそのと  
きにまた入れます。  
感想などお待ちしております。

### 第3話：ザ・パニック（前書き）

裕也がアヤカシ荘に入居して数日が過ぎた。

最初の夜以来、彩たちもそれほど裕也が驚くようなことはせず、平和な日々が流れていた………

### 第3話：ザ・パニック

「さてと、そろそろ行くかな。」  
スーツを着込み、ネクタイを締めると裕也はカバンを持ち部屋を出た。

今日は大学の入学式。キャンパスに入ると早くも部活やサークルの新生勧誘合戦が熾烈を極めていた。

実際、裕也が正門をくぐり入学式の会場となる体育館までのおよそ100mを移動しただけで、20以上のサークルなどの勧誘のチラシが手に持たされていた。裕也はひとまずそれら全てをカバンにしまい、体育館へ入っていった。

裕也の入学した聖都大学は都心から電車せいとたいがくで30分ほどの場所にある文系理系そろった総合大学である。裕也は元々文系なので、法学部法律学科と経済学部経済学科、それと社会学部歴史学科を受験し、法学部法律学科に合格したのだった。

学長の退屈な話を終え、裕也は外国語科目のクラス分けの書かれたプリントを渡されて体育館を出た。

裕也たち新入生がぞろぞろと体育館を出て行くと、入学式が始まる前よりも勧誘のチラシを配っている人の数は増えており、身動きが取りづらい状態にまでなっていた。

と、そのとき。勧誘のチラシを配っている集団の端っこで悲鳴があがった。裕也が背の高さを活かして悲鳴の上がったほうを見ると雪子と彩、麻美が逃げ回り、その後ろから薫がなにやら叫びながら追いかけていた。さらにあたりかまわず薫が能力をぶっ放しているせいで、関係のない人々が巻き添えを食って石にされていた。裕也はため息をつきつつ、

「みんな、何をやってるんですか？」

雪子たちに声をかけた。

「あっ、裕也くん。ちよつとしたことで薫が怒っちゃって大変なのよ。なんとかしてくれないかしら？」

雪子が走りながら裕也にそう言う。とりあえずその場にいると薫の暴走に巻き込まれそうなので裕也も一緒に走り出した。

「い、いつたい、なにをしたんですか？あのおとなしい薫さんがあそこまで怒るって尋常じゃないと思うんですけど……」

裕也が走りながら3人にたずねる。ちなみに、すでに裕也たち4人と追いかける薫以外は全員石にされていた。

「薫が昼寝しているときに麻美ちゃんが彼女の顔に落書きしたのよ。それで怒って、知ってて止めなかった彩や私も同罪だとか言って現在に至るってわけなの。裕也くん、止められる？」

雪子が事情を説明する。

「ちよつとしたいたずらですぐ落書きは消したのに、なんでそこまで怒るのかな？」

麻美は大して反省してないようである。そこで裕也は、

「麻美さん、それはあなたが全面的に悪いです。というわけで、うりゃっ！」

裕也は客観的に麻美を断罪し、走り続ける麻美の足をひっかけ、転ばした。

「きゃあっ！」

突然のことに麻美はかわすこともできずにすっ転び、その間に裕也・雪子・彩は建物の陰に逃げこんだ。

麻美が起き上がった直後、薫が追いついた。

「麻美……いつもは害がないからあなたのいたずらも放置しているけど、今回はさすがにいたずらの度を越えているわ。制裁を受ける覚悟は出来てるわね？」

薫は麻美にそう告げ、麻美がなにか言う前にふところから取り出した石のハリセンで麻美の頭をひっぱいた。

それで気が済んだのか、薫は追いかけている間に石にした人々を

元に戻し、何事もなかったかのように去っていったのだった。

裕也が「彼女たちを怒らせてはならない」ということを再確認したのは言うまでもない。

### 第3話：ザ・パニック（後書き）

平和だったここ数日であつという間に暗転させる入学式の騒動。

なお、薫によって石にされた人々は何が起こったか覚えていないらしい……

果たしてこの先裕也をどんな騒動が待ち受けているのか？

#### 第4話：裕也と行事予定（前書き）

前作「ワイルドウイングス激闘史」の連載開始からの総読者数をわずか一日でこの作品は超えました。こちらは昨日（30日）現在370人を越えております。コメディイとしては弱いかもしれないこの作品ですが今後ともよろしくなのです。

#### 第4話：裕也と行事予定

「ふむふむ、しばらくは行事が続くな……ん？今週末はいきなり旅行？なになに、クラスメートとの親睦を深めよう、か……大学側も結構考えているんだな……」

ハプニングに見舞われた入学式から帰宅し、サークル等の勧誘チラシを眺めていた裕也は、その間からひらりと舞い落ちた年度始めの行事予定の書かれたプリントに気づいて読んでみると、そんなことが書いてあった。

「それにしても、結構オレみたいに地方から出てきて一人暮らししている人っているもんだな……」

裕也が各クラスの集合場所となる教室でクラスメートになった者たちと話したり、あるいはその後の自己紹介を聞いたりしてみると、20人ほどのこのクラスで地元在住の学生はたった2人しかいないらしく、裕也も含めて、あとは全国各地からこの大学にやってきた者であった。

「今度の旅行で友達を作らないと大変かもな……でも、友達ができても家に呼ぶのはなあ……」

旅行に関するこの書かれたプリントを改めて見てみると、上級の数人がアドバイザーとして同行する旨が書かれており、またその上級生の話として、「この旅行で仲のいい友達を作ろう。一人ぼちの大学生活なんてつまらないぞ。」と記してあった。

もともと裕也は友達が多いほうではない。その理由は単に彼自身が人付き合いを苦手としていることであつた。しかし、地元を離れ、

大学に入ったことでそんな自分を変えようとしているのだった。

今裕也が心配なのは、「友達ができるか」よりも、その後のことだった。友達ができれば、そのうち裕也が一人暮らしということもあり、友達が遊びにきたり泊まったりすることもあるだろう。その際に近所の住民のことが知られたらと思うと、裕也はため息をつくしかなかった。

「ゆうーやーくーん。何をため息なんかついてるのかな？」

突然麻美が裕也の顔をのぞき込んで来た。

「うわあつ！あ、麻美さんですか。驚かさないでくださいよ、っていうかドアに鍵かけておいたはずなのにどこから入ってきてるんですか！？」

裕也は驚きのあまりずざざざ、と後ずさりしながらたずねる。

「鍵なんて私の魔法でちよちよいのちよいよ。で、そんなことはどうでもよくて、昼間のことを謝りに来たのよ。私のいたずらが原因で薫から逃げ回るハメになったり、大学の人たちを巻き添えにしちゃったり、本当にごめんなさいね。あら？裕也くん、旅行に行くの？」

麻美はひとしきり謝ると、裕也が後ずさりしたときに床に舞い落ちた旅行のプリントを拾い上げてそうたずねた。

「ええ、大学のクラスで親睦を深めるってことで今週末に2泊3日で草津まで。今はそれに必要なものを準備しようかと思っていたところなんですよ。」

裕也がそう話す。

「へえ、いいなあ。ねえ……」

「ついてこようなんて考えないでくださいね。」

麻美がなにか言いかけたところに機先を制し裕也がクギを刺す。

「まだ何も言っていないじゃない。」

麻美がふくれつつらをしながら反論するが、

「……でも、そう言おうと思ったでしょ？」

「……はい。だって温泉なんてもう何年も行ってないもの。た

まには行きたいわよ。」

裕也がさらに続けてそう言うと、麻美はあっさり認め、温泉に行きたいと駄々をこねる。

「温泉に行きたいのなら自分たちで勝手に行ってください。ただし、オレたちの行く先には来ないでください。」

裕也は呆れたようにそう話し、麻美はわかったのかわかってないのか、あいまいに頷くと裕也の部屋から出て行った。

#### 第4話：裕也と行事予定（後書き）

麻美はあいまいな返事しかしなかったということはやはり……？次  
回、裕也は旅行へ出発。今度はどんな騒動が起こるのか？

## 第5話・出発（前書き）

そして親睦旅行の朝がやってきた。

これから2泊3日の旅行が始まる……

## 第5話・出発

「くあ……眠い……」

現在時刻午前8時。親睦旅行出発の朝、裕也は荷物を抱えて歩きながらあくびをしていた。

8時30分、集合した学生たちは数十台にも及ぶバスに分乗し、各学部ごとに分かれた目的地（裕也たち法学部は草津）へと出発した。

そのころのアヤカシ荘、103号室

「どうやら裕也たちは出発したみたいですね。みんな、準備はできてますか？」

麻美が机の上の水晶玉に映し出された裕也たちの乗ったバスを見ながらそう呼びかける。

「はい、いつでも出発できますよ。」

「……大丈夫」

「アタシもいつでもOKだぜ！」

雪子、薫、彩は三者三様の反応を示す。

「それじゃ、私たちも行きましょうか。」

麻美がそう言った直後、4人の姿は部屋から消えていた。

一方場面は再び裕也たちのバスに戻る。

朝から大あくびをするほど裕也は眠かったらしく、バスが動き出すなり眠りに落ちていた。

と、隣の席に座ってる女の子が裕也をゆすって起こした。

「ん……」

裕也が目を覚ましてみると、

「あ、北方くん起きた？これから各自自己紹介するから全員起こせ  
つて。」

隣の席の女子はそう裕也に微笑みかけた。

「ああ、そうか……ありがとう。」

裕也は自己紹介くらいは聞いておくべきだと考えていたので、こ  
れは素直に礼を言った。

かれこれ自己紹介は続いていき、裕也の番が来た。

「えーと、北方 裕也です。出身は新潟で、高校のときは人付き合い  
が苦手であり友達がいませんでした。大学ではそれを克服した  
いと考えているのでよかつたら積極的に話しかけてください。」

簡単にそう挨拶すると、どこかから、

「新潟から出てきてるということは一人暮らしだよね？どの辺に住  
んでるの？」

そんな質問が投げかけられた。

「どこに住んでも何も、大学の隣にあるアパート、アヤ……じゃ  
なくて、「流星荘」です。友達は作りたいですが、できればうちに  
は来ないでください。下手すれば命が危ないですから。」

裕也は質問に答えるついでにアパートに来るなと警告した。

案の定ブーイングが飛ぶ。

「なんでー？部屋に見られたくないものでもあるんじゃないのか？  
？」

そんな憶測さえも飛び交う中、裕也は覚悟を決めた。

「別に部屋には何も無いよ。でも、ご近所さんがちょっとアレでね

……これ以上は勘弁してくれないかな？」

裕也がそう答えると、

「まあ、ここで追求するより今度直接たずねたほうが早いな。ああ、

自己紹介がまだだったな。俺の名は築地つきじ。速人はやと。出身は地元だ。よろしくな。」

速人と名乗ったクラスメートは早くも裕也の家に来る気満々だった。

そして裕也、そしてついでに速人も終わり、裕也の隣に座っている女の子の番が来た。

「井上いのうえ 智子ちこといえます。出身は千葉で、大学の女子寮で暮らしています。みなさん、よろしくお願いしますね。」

智子がそう挨拶すると、あたり一面（ほとんど男子）から拍手があがった。

智子が言ったとおり、この聖都大学には学生寮はあるにはあるのだが、なぜか女子専用のものでしかなく、男子の一人暮らしはアパートなどを借りるしかないのである。とはいえ裕也の住むアヤカシ荘はこの街の家賃相場の3分の1程度で、女子寮の1か月分より安いらしい。

その後も自己紹介が続いていき、終わったあとは親睦を深めるという意味でゲームをして盛り上がり、2時間ほどしてバスは目的地に到着した。……のだが。

「おい、なんかあの女の人たちきれいじゃね？」

「なんかこのバスのほうを見てるけど、なんなんだろうな？」

裕也は降りる支度をしていると、先に降りた男子たちの声が聞こえてきた。

（別にきれいな女の人なんていくらでもいるだろ……気にするほどのことじゃないな。）

そう思いながらバスを降りた裕也は、目の前にいた人物におもわずめまいを覚えた。

「ちよ、なんでここにいるの!？」

裕也は荷物をその場に放り出すと4人に詰め寄っていた。

「あら、偶然ね裕也くん。私たちも温泉旅行に来たのよ。まさか裕

也くんもこの旅館だとは知らなかったけど。」

麻美がニコニコと笑いながら裕也に話す。

「まあ、偶然だというのならそれでもいいですが、旅行中オレたちに関わらないでくださいね。」

裕也も笑顔に見えるが、目が笑ってなかった。と、そこに、

「なあ、北方、その人たち誰だ？知り合いなら紹介してくれよ。」

速人がそう言いながら裕也に寄ってくる。

「あゝ……オレが住んでるアパートのご近所さんたちだよ。」

裕也は簡単にそうとだけ説明した。

「初めまして、白崎 雪子です。」

「……石崎 薫……よろしく」

「真崎 麻美よ。よろしくね」

「アタシは盛野 彩。」

4人はそれぞれ自己紹介すると、

「こんなきれいなご近所さんたちがいるなんてうらやましいじゃねーかコンチクショウ！何が不満だったんだ？」

速人が裕也にヘッドロックをかけながらそうたずねる。

裕也はまさか「彼女たちは人間じゃなく妖怪なんだ」などとは言えず、あいまいに言葉を濁すしかないのだった。

## 第5話・出発（後書き）

と、いうわけで……

あけましておめでとございませう。2007

今年も自分の小説をよろしく願ひします

偶然か、それともわざとか、同じ旅館に泊まることになった。これはトラブル必至か？

## 第6話：旅館到着

裕也が雪子たちのことについて追求を受けていると、

「お前ら、早く中に入れ。もうほとんど部屋に向かったぞ。」

裕也たち法学部を引率してる先生の一人がやってきてそう言った。

「ほら、ああ言ってることだし、さっさと行こうぜ。」

裕也が半ば逃げるように旅館へ入っていった。

当たり前と言えば当たり前だが、団体客である裕也たちと個人で部屋を取った雪子たちの部屋はかなり離れていた。

しかし、裕也は安心していなかった。彼女たちがひとたび本気で暴れたらこの旅館など吹っ飛ぶだろうから。ここ数日のことで裕也はそのくらいまで考えていた。

(だからこそ、みんなには彼女たちのことを知られたくない……)

裕也がそんなことを考えながら割り振られた部屋へ向かうと、速人と他に4人のクラスメートがいた。

「えーつと……」

裕也が部屋割りのリストを見て、さっきの自己紹介を思い出した。同じ部屋にいるのは、浅田 豪、小笠 賢、齊藤 靖、田野口 貴之の4人とさきほど雪子たちのことで追及してきた築地 速人の計5人だった。

「荷物置いたらすぐ集合だつてさ。行こうぜ。」

裕也が荷物を置いて集合場所となる大広間へ向かおうとした。ほかのみんなもそれについていくが、速人が先行する裕也の肩をたたいて振り向かせると、

「あとで自由時間のときに聞かせてもらうからな。」  
とだけ言った。

集合した先の大広間では旅行中の注意（小学生か？）などの連絡事項が話され、その後はこの旅行にアドバイザーとして同行している上級生たちから大学生活の楽しさなどがアツク語られていた。

一方そのころ、雪子、薫、彩は「温泉に行こう」と麻美を誘ったが、「後でゆっくり入る」といつて一人でどこかへ行った。

「そんじゃ、あたしたちだけで楽しむとしますか。って、雪子、アంత温泉入って大丈夫なのか？」

彩が着替えなどを持ち温泉へ向かおうとしたところでふと雪子にたずねる。

「あら、大丈夫よ。もう何年も人里で暮らして暮らしてるから並の雪女より進化してるのよ。」

雪子はそう言うところの中で一番つきつきと温泉へ向かっていった。

そして一人残った麻美は

（さてと、いろいろイタズラ仕掛けにいこーっと）

こないだのことをまったく反省してない感じで楽しそうに部屋を後にした。

まず適当に旅館内を散策し、大きな扉の前にたどり着いた。そつと中の様子を伺ってみると、そこは裕也たちが集まっている部屋だった。だが、どうやら集会は終わったようで、学生たちが立ち上がり動き出そうとしていた。

（わわっ、ヤバイ！）

麻美は物陰に隠れると、ドアを魔法でふさいだ。

学生の一人が部屋から出ようとドアノブを握って押し開けようとした瞬間にドアが開かなくなったため、後ろのほうから見たら勢いよくしまった扉に弾かれたように見えた。

「なんだ、どうしたんだ？」

誰も外に出て行かないのを不思議に思った上級生が扉のほうへや

ってきた。

「いや、なぜかドアが開かないんです。」

一番最初にドアに弾かれた学生がそう訴え出る。それを聞いて上級生や引率の教授たち総出でドアを開けようとするが、びくともしなかった。

(まさか、あの4人……のうち彩さんはそういうタイプじゃないから、雪子さん、薫さん、麻美さんの3人の誰かが……？いや、それ以外考えられないか。で、ドアはただ閉まっているだけで凍ってるわけでも石になってるわけでもない……とすると、だ)

裕也は声に出さず自分なりの結論を導き出すと、出入り口とは反対の壁のほうへ行き、携帯を取り出して、

<ドアをふさいでるのはあなたですね、麻美さん？早く解除してください。>

と麻美にメールを打った。返事はすぐに返ってきて、

<あ、バレた？このくらいならいいかと思っただけけど、やっぱりダメか。わかった、解いておくよ。>

と書いてあった。直後、ドアが開くようになり、裕也を含む学生たちはようやく大広間を出て各自の部屋へ戻ることができたのだ。

裕也が雪子にメールを打っておいたので、麻美がその後雪子たちにごっぴどく怒られたの言うまでもない。

## 第6話：旅館到着（後書き）

感想などいただけたら幸いです。

まだまだ旅行は始まったばかり。着いて早々麻美のイタズラに巻き込まれたが、この後はどうなることやら……

## 第7話：自由時間

集会の終了後にひと騒動あったものの、どうにか部屋に戻った裕也が時間を確認すると、午後3時半を回ったところだった。これから午後6時半の夕食までは自由時間となっていた。

散歩がてら雪子たちの様子を見に行こうかと部屋を出ようとした裕也は、速人や豪たちに捕まっていた。速人以外は雪子たちのことを特に気にしていないそぶりだったが、実際はみんな気になっていたようで、見事なチームワークを見せると裕也を取り押さえたのだった。

「さて、もう逃げられないぞ。さあ、話してもらおうか、北方。」  
床に組み伏せられた状態の裕也に対して勝ち誇った表情の速人が言う。

「わかった、もう逃げない。みんなが聞きたいことも話すから離してくれ。これじゃ話しづらい。」

裕也は負けを認め、話す事を約束した。

「それじゃ、どうぞ。」

組み伏せていた速人以外の4人は裕也を離すと、話を促した。

「ああ、話すのはいいが、まずどこから話したものかな……って、なんか数が増える!？」

裕也は話しはじめに困ってしまい、ふと速人のほうを見ると、いつの間にか速人たち同室のクラスメートの横にもう一部屋のほうに分けられたクラスメートたちが興味津々といった顔で話し始めるのを待っていた。

「そうだな……名前は本人たちの口から聞いたから、彼女たちの年齢はいくつだ？」

速人はとりあえず年齢をたずねる。

「えーと、雪子さんが23歳、薫さんが22歳、麻美さんが25歳、

彩さんが26歳って聞いたかな。」

裕也がそう答えると、聞いていたクラスメートのテンションが一気に上がった。中には指笛を鳴らし始めるものまでいて、正直うるさかった。

「それじゃ、次の質問だ。彼女たちの職業は？」

速人は周りが少し静まるのを待ってから次の質問へ移った。

「すまんがそれは知らない。オレだってまだアパートに越してきて日が浅いんだ。彼女たちの全てを知ったわけじゃない。」

裕也はそう答えた。と、そのとき。

「それについてはあたしたち自ら答えてあげるわ。」

そこに現れたのは麻美を除いた3人だった。

「おお〜！！うわさのご本人登場だ！！」

クラスメートのテンションはもはやマックスに達し、それまで鎮めるほうに回っていた速人さえも騒ぎ立てるほうに回っていた。

「な、なんでこっちに来てるんですか！旅行中は関わらないでくれて言ったじゃないですか！？」

裕也が立ち上がり3人に詰め寄る。

「麻美ちゃんがしたことを謝りに来たの。おかしいと思ったのよね、麻美ちゃんが温泉に行きたいって言い出してここに来たのにすぐに入らないなんて……あ、ちなみに今はきついお仕置きを済ませてあの子も反省してるみたいだから。」

雪子がおっとりとした笑顔でそう裕也に耳打ちした。

「え、ああ、そうですね。まあ、実害はなかったんですけどもういいですよ。それと、オレ以外はみんなの正体を知らないんですから、今後妙なことはしないでくださいね？」

裕也もまた雪子に耳打ちする。と、

「おい北方。何を内緒話なんかしているんだよ。オレたちに聞かれちゃまずい話なのか？」

豪が裕也と雪子の内緒話に気づいてそうたずねる。

「え、あ、いやたいしたことじゃないよ。あ、ほら雪子さん、みんな

なの質問に答えてくれるんでしょう？あとは任せたまよ。」

裕也はうまく話をそらし、雪子たちを前面に押し出した。

「それじゃ、皆さんの職業は？」

気を取り直して速人がたずねる。

「すみませんがそれはノーコメントってことでお願いできるかしら？」

雪子以下3人と職業はノーコメントで通した。

「じゃあ皆さんのスリーサイズをぜひ……」

速人が鼻の下を伸ばしながらたずねる。

「それならかまいませんわ。私は上から85・56・81ですわ。」

「……上から79・59・80……」

「アタシは上から95・54・97ってところだな。だけどアタシらに惚れんなよ。火傷するぜ。……それじゃ、そろそろアタシらはお暇いとましようかね」

3人それぞれスリーサイズを答え、最後に彩が警告し、3人は裕也たちの部屋を後にした。

「さて、ご本人たちが帰っちゃったことだし、また北方を質問攻めにしようか。まずはさつき雪子さんと内緒話していただろう、アレはいつたい何を話していたんだ？」

速人が裕也にそうたずねる。

「ああ、さつき集会のときに大広間から出れなくなっただろ？あのときにドアをふさいでたのが今来てなかった麻美さんだったらしいんだ。そのイタズラのことを詫びにきて、彼女のお仕置きの件でオレと話をしていた、それだけのことだ。」

裕也は麻美や雪子たちの正体をうまく隠してさっきのことを話した。

「ほう、まあそれはそれでいいとして、次だ。彩さんが最後に言った『惚れたら火傷する』ってのはどういうことだ？」

速人は納得したのかしてないのかわからないが、次の質問に移った。

「それは聞いてそのままの意味だ。他意はないだろう。惚れたとしても彼女たちがお前らになびくことはない。もちろん、オレにもな。」

裕也は冷静にそう告げ、時計を見るといつの間にか夕食の時間が近づいていた。

「さ、そろそろメシの時間だ。食堂行こうぜ。」

裕也はそう言って立ち上がると、クラスメートとともに食堂へ向かうのだった。

第7話・自由時間（後書き）

感想などお待ちしております。

第8話・自由時間その2 雪子たちのもとへ(前書き)

8話目にしてはやくも10000Hitを目前にしています。

7日

目(1/3) 現在990Hit

この拙い小説にお付き合いしていただける皆様に感謝です。

## 第8話：自由時間その2 雪子たちのもとへ

夕食を終え、部屋に戻った裕也たちは、再び自由時間を過ごしていた。速人たちはもう聞きたいことは全て聞いたとばかりに、裕也にそれ以上雪子たちのことで追求してこなかった。裕也は同室の仲間や隣の部屋から乱入してきたクラスメートたちも交えてときに雑談、または誰かが持ち込んだトランプをしたりしていた。

と、部屋の扉を誰かがノックした。一番入り口に近かった裕也が扉を開けると、どういうわけか智子を先頭に数人の女子が部屋に入ってきた。

「えっと、井上さん：だっけ？誰か男子に用でもある？必要なら呼ぶけど？」

裕也が少し驚いた顔で智子にたずねる。

「えっと、用があるのは北方くん、あなたよ。」

智子はちよつと照れながら裕也にそう話す。

「え、オレ？いったい何の用？」

裕也はさらに驚いて智子を見る。

「えつとね、北方くんの知り合いつていう4人の女の人がいるじゃない？あの人たちに会いたいたいんだけど、部屋の番号わかる？」

智子は雪子たちに会いたいと申し出てきた。

「ああ、わかった。ただ、一応オレが案内するよ。たぶんみんなだけで行ってもわからないだろうから。まあ、案内だけして話を取り次いだらオレは撤退するけどね。男には聞かれたくない話ってこともあるだろうし。」

裕也は智子たちにそう言うと、雪子にメールを打って部屋の番号を聞き、智子たちを連れて向かった。

部屋の入り口で用件を話すと、雪子たちはいやな顔ひとつせず智子たちを部屋に入れた。

「それじゃ、オレはここで。」

裕也はそう言うと、智子たちを残して雪子たちの部屋を後にした。

「それで、私たちに何の用かしら？」

雪子が智子たちにそうたずねる。

「えっと、あの、その……とつてもお綺麗ですよ。その美しさの秘訣を教えてもらいたいと思ひまして……」

智子はそうたずねる。

「美しさの秘訣といわれても……別に特別なことはしてないわ。がっかりさせるようで悪いけど、本当に何もしてないの。強いてあげるなら毎日のお手入れといったところでしょうか。」

雪子はニコニコと笑いながらそう答える。

「毎日のお手入れ……ですか。じゃあ、そのお手入れの方法を教えてください。でもどうやってできますか？」

なおも智子たちは食い下がる。

「ちょっと特殊な方法だからあなたたちに合うかどうかはわからないわよ。下手すれば今よりひどくなることもあるわ。それでも試してみる？」

雪子は警告を発し、念を押す。

「特殊な方法って、どんなのですか？きれいになれる可能性があるなら、試してみたいんです。」

智子はそう雪子に話す。

「そこまで言うなら仕方ないわ。でもその方法をやる前に聞いて欲しいの。私たちは人間じゃない。いわゆる妖怪ってやつね。」

雪子は智子たちに自らの正体を明かすと、4人それぞれ変身して真の姿を見せた。

「あら？やっぱ驚いた？」

雪子が黙り込んだ智子たちに近づく。すると、

「かっこいい……」

智子がそうつぶやいた。

「へ？」

雪子が少々マヌケな声をあげる。その後、旅館全体が揺れるほどの叫び声を智子たちがあげた。

あまりの叫び声に部屋に戻りかけていた裕也が駆けつけたほどである。

「どうした！？」

裕也が部屋に突入してそう言うと、雪子たちは正体をあらわし、智子たちはそれを見て歓喜の叫び声をあげていた。

「これはいったい何事ですか？」

裕也があ然とした表情でたずねると、

「北方くん、なんでこんなおもしろいこと黙ってたのさ？雪子さんたちが人間じゃないなんて。」

智子が抗議の声をあげる。

「え、だって普通こんなこと言っても信じないじゃないか。」

裕也がそう言ったところに、さっきの叫び声を聞きつけた速人たちもたどり着き、雪子たちの姿を見て同じように驚くのがあった。

結局、みんなが落ち着いたところを見計らい、クラスメイト全員に4人の正体をふくめて全て話すことになったのだった。

## 第8話・自由時間その2 雪子たちのもとへ（後書き）

いつかはばれることだろうが、ここで雪子たちの正体がばれた。

まだ旅行は1日目なのに騒動は終わらない……さてどうなることやら。

追記 ジャンルを変更しました。コメディイというにはちょっとコメディイらしさがなさ過ぎるので、その他に変更することとします。何かご意見等ありましたら感想欄やメッセージなどお寄せいただけたら幸いです。

第9話・自由時間その3 智子たちの美容大作戦（前書き）

調子がいいので本日2話目です

### 第9話：自由時間その3 智子たちの美容大作戦

裕也から雪子たちの正体などについての話を聞き終えたクラスメイトたちは、普通なら信じないような話のはずなのに、目の前にいる存在のおかげか、それとも持ち前の順応力なのだろうか、普通に納得していた。

「まあ、こんな感じなんだけど、もしこの状態を見ないでオレがこのことを話していたらみんなは信じる？」

裕也が話し終えて多少ざわついているところにたずねる。

「どうだろうな……まあ、信じたと思うよ。別にこの世の中何がいたっておかしくはないだろうし。」

みんな同じ意見だったようで、速人が代表して発言したときにうんうんと頷いていた。

全ての話を終えたところで、裕也や速人たちは雪子たちの部屋を後にした。そして、智子たちは

「私たち流の肌の手入れは簡単に言えば自分たちの持つてる特殊能力を利用したものなの。私は対象の身体の表面を凍らせる『冷凍法』、薫ちゃんは同じように対象の身体の表面を石化させる『石化法』、麻美ちゃんと彩さんは美容向きの能力じゃないから私や薫ちゃんが手伝っているのと、一般向けの化粧品の併用ですね。」

さっきの話の続きということで、雪子から肌の手入れの『特殊な方法』について説明を受けていた。

「それで、私の『冷凍法』か、薫ちゃんの『石化法』の2通りがあるけど、どっちを試してみたいかしら？」

雪子が一通り説明した後、智子たちにどっちにするかとたずねた。「それじゃ、『冷凍法』のほうでお願いします。」

智子を含むここにいる女子の大半が『冷凍法』を選択したのに対し、

「あの……『石化法』のほうをお願いしたいんですけど……」  
一番後ろからついてきていた宮本みやもと 静香しずか一人だけ薫の『石化法』  
を選択したのだった。

「わかりました。それじゃ、えーと、『冷凍法』は6人ね。3人ずつやるから、先にやりたい子3人はそこに寝転んで。」

雪子が布団を指差し、智子と女子A、B（名前考えても今後出てこないと思われるのでアルファベットで）が布団の上に寝転ぶ。

「服はそのままでもいいんですか？」

女子Aが寝転んでからふと気づいたことを聞いてみる。

「服は脱がなくてもいいけど、脱いだほうが効果が出る可能性は高いわ。」

雪子がそういうと、3人も服を脱ぎだした。

「じゃあ、あたしらが外で見張ってるよ。男が来たら大変だしな。」

彩と麻美がそう言って部屋の外へ出て行った。

「それじゃ、準備できたわね？凍ってる間はほとんど仮死状態に近くなるわ。次に目が覚めたときに、成功ならきれいになってるし、失敗なら凍傷が残る可能性もあるわ。本当にやっていい？」

雪子が最終確認を智子たち3人にする。

「はい、大丈夫です。」

智子たち3人は短くそう答えると、目を閉じ、それを見てから雪子は3人に冷気を浴びせ、表面を凍結させた。

約30分後、雪子が凍結を解除し、目を覚ました3人は、見違えるほど肌が白くきれいになっていた。どうやら成功したらしい。

その後、残りの女子3人（C、D、E）も同じようにやってもらい、きれいになったと喜んでいた。

そして、ただ一人『石化法』を選んだ静香は

「……じゃ、他のみんなと同じようにそこに寝転んで。」

薫が静香にそう言って、静香は布団に寝転んだ。

「……私のやり方は普通のヒトには今までやったことがないからうまくいくかわからない。それでも本当にやる？」

薫もまた最終確認をする。

「はい、お願いします。どうにかなっても自業自得ですから。それに私、正直あまりきれいじゃないんで、うまくいったら儲けものつてくらいの気持ちでやるうとしてますから。」

静香はそう話すと、やはり目を閉じた。そこに薫が目を見開き、静香の身体を石化させた。

約15分後、石化から元に戻り、目を覚ました静香は、本人も驚くほどきれいになっていた。

「……案外うまくいくものですね。安心しました。」  
薫もほっと一息ついた。

用が済み、雪子たちの部屋を後にしようとした智子たちに対し、「もしまたやりたくなったらいつでもいらっしゃい。旅行が終わって帰ったあとなら私は流星荘ことアヤカシ荘の101号室、薫ちゃんも隣の102号室に住んでるから。」

雪子が笑顔で智子たちにそう言い、智子たちは「はい。ありがとうございます！」と言って各自の部屋へ戻っていったのだった。

第9話：自由時間その3 智子たちの美容大作戦（後書き）

雪子たちによる智子たちの美容大作戦は見事成功、今後いつでもやってあげるということは、この旅行が終わったあとは智子たちがこまめにアヤカシ荘へ通うということか……？

まだまだ続く親睦旅行、果たしてどうなるのか？

第10話：Let's 温泉！（前書き）

昨日ついに1日のアクセス数が初の2000Hit達成！

この調子で伸ばしていけたらいいなと思ってますので今後ともよろしくお願いします。

## 第10話：Let's 温泉！

「温泉行こうぜ」

雪子たちの部屋から戻ってきてしばらく経ったところで、速人が立ち上がってそう言った。

「そついやまだ入ってなかったっけな。よし、行こう。」

裕也も賛成し、他のクラスメートたちも連れ立って露天風呂へ向かった。

「お、さすがに広いな」

裕也が身体を洗い終え、相当な広さのある岩風呂に浸かっていると、壁際に速人と豪が何かをしているのが見えた。

速人たちは裕也が見ているのに気づくと、裕也のところまでやってきた。

「二人はあんなところで何をやってたの？しかも浅田くんはカメラなんて持って……って、まさか」

裕也がそつたずねると、

「まあ、話は後だ。あの壁際まで行ってみな。」

速人がそう言って裕也の背中を押す。裕也がある程度予測をつけて壁際に寄ってみると

「ねえ、智子ちゃんってずいぶんおつきいよね。いくつくらいあるの？」

「わ、私は大したことないよ。それより彩さんたちのほうがおつきいですよ。」

「そ、そりゃあアタシは男を籠絡する妖怪だからそついう風になってるもの。」

などといった会話が聞こえてきた。

「こ、これは……やっぱり、そつか……」

冷えないようにいったん温泉に入って温まっている速人たちのところに戻ってきた裕也が驚きと呆れの声をあげる。

「そう、ここは男女の風呂場がああ仕切り一枚で隔てられてることだ。つまり、アレを使えば覗ける可能性が高い。」

速人がそう言って風呂場の端っこにあるイスの山を指差す。

「で、やるのか？」

裕也がたずねる。

「ここはやるつきやないだろ。こんなおいしいシチュエーションなんてそうそうないぞ。」

速人が鼻息も荒くイスを積もうと動き出す。

「オレはやめておいたほうがいいと思うぞ。こういう悪巧みがうまくいったためしなんてないし、さらに悪いことに今回の場合、向こうには少なくとも彩さんがいる。だとすればおそらく雪子さんたちもいると考えるのが普通だろう。怒らせたら何されるかわからないぞ。氷漬けか、石にされるか、それとも魔法の餌食か、はたまた彩さんに精气吸い取られて気絶させられるか、あるいはクラスの女子からイスや風呂桶が飛んでくるかもしれない。それでもやるのか？」

裕也がもし覗きがバレた場合の報復の例を挙げ、警告する。

「警告は感謝する。だが、漢<sup>おとし</sup>としてここまで来たら後には引けねえ。行くぞ、豪。」

速人は裕也の警告を受け止めつつもそのままイスを積み上げ、豪とともに上っていった。

「いざ、パラダイスへ」

速人が仕切りの上から顔を出し、また豪がカメラを突き上げたその瞬間。

「はい、残念」

二人の目の前には笑顔ながらただならぬ雰囲気を放っている雪子がいた。

「あ、あはは……し、失礼しました……」

速人と豪は笑ってごまかして逃げようとしたが、

「笑ってごまかしてもダメよ。しばらく頭を冷やしてなさい」  
雪子は笑顔のまま二人とカメラを氷漬けにし、ついでに仕切りの上の部分をもう覗けないように氷で覆ったのだった。

「だからやめとけ、って言ったのに……」

裕也と他のクラスメートは氷漬けになった二人を温泉に放り込んで溶かすと、呆れたようにそう言い、1日目の夜は更けていくのだった。

第10話：Let's 温泉！（後書き）

長かった1日目もようやく終わり。

2日目にはどんな騒動が待ち受けていることやら……

第11話：早朝ドッキリ&オリエンテーリングイベント発生(前書き)

2泊3日の旅行、やっと2日目突入。

早朝から騒動の予感　？

## 第11話：早朝ドッキリ&オリエンテーリングイベント発生

どんなに騒がしい夜だって、かならず朝はやってくる

2日目の朝がやってきた。しかし、昨晚騒ぎすぎた裕也や速人たちは起床時間となつている朝6時半になつてもピクリとも動かなかつた。

そこに忍び足で接近する黒い影　　もとい麻美。

(どうやらまだ起きてないのかな？これはチャンスね。って、誰か来た！?)

麻美は裕也たちが寝ているところに何かイタズラしようとしたようだが、直前に何者かの接近に気づいてあわてて隠れた。

「もう起床時間なのに誰一人起きてこないとは……仕方ない、アレやるか。」

部屋の前で誰も起きてないことを確認し、そうつぶやいたのは旅行にアドバイザーとしてついてきてる上級生数人のうちの一人だった。その声に後ろのほうにいる別の上級生が頷くと、裕也たちの部屋の隣にある自分たちの部屋に戻り、ビデオカメラと何かが書かれた木の板を持ってきた。

「よし、ターゲットはまだ起きてない、作戦開始だ。」

リーダーらしき上級生の一言でカメラを持った別の上級生が部屋に突入していく。

「……………くん、……………方くん、…北方くん、起きてくださいーい、朝ですよー」

上級生の一人が裕也を揺さぶって起こそうとする。

「ううーも、もう朝か……………」

そう言いながら体を起こした裕也は目の前にカメラがあるのに気づき、眠気が吹っ飛んだ。

「な、ななななんでカメラ!?!」

裕也が指差しながらそう叫ぼうとすると、

「シューっ！まだほかの連中も起きてないんだ。騒いだら君だけやられ損だぞ。」

カメラを持った上級生がそう笑う。

「ま、ひとまず一人目の寝起きドッキリ大成功！」

指示を出した上級生が後ろから小さな木の板を取り出すと、そこには「寝起きドッキリ大作戦」と書かれていた。

その後、同じ部屋の速人や豪たちも同じようにドッキリを仕掛けられ、全員がカメラに驚くという、仕掛けたほうにとってはこれ以上ないほどの大成功だった。

ちなみに別働隊が隣の部屋の連中にも仕掛け、すでに起きていた一人を除く全員がうまくいったらしい。

その頃、先にイタズラを仕掛けようとした麻美は、上級生たちにお株を奪われたことでイタズラをあきらめ、そのまま部屋に戻っていたのだった。

朝食の席ではそれをネタに大いに盛り上がっていた。というのもさつき録画した各部屋の寝起きドッキリの様態を食堂のテレビに映し出したせいである。このとき、ただ一人ドッキリに失敗した一人に対し「空気読めよ〜」などと罵声が飛び、「そんなあ〜」と失敗したやつが返し、そこでまた笑いが起こっていた。

朝食を終えると、今日の予定であるオリエンテーリングのために動きやすい格好に着替えて集合とのことだった。

各部屋ごとにひとつの班を結成し、旅館周辺の山の中を歩き回る

単純なものだったのだが……

「昨日下見したときはいなかったが、この山の中はクマやイノシシなどの動物がいろいろいるそうだから気をつけていくように。」

引率の教授からそんな注意が入った。

(そんな危険なところに行かせるなよ！)

と全員が思ったのは言うまでもない。と、誰かが本当に突っ込んだ。すると、

「これは毎年やってることで、出る出るいいながらも実際は出てないから、大丈夫だろう。もし出たら大声で助けを呼ぶこと、いいな？」

どうやらあくまでも中止する気はないらしかった。

結局そのまま出発することになり、クジで最後になった裕也たちの班も出発の順番が来た。と、そのとき裕也の携帯にメールが入った。

<山の中でイタズラを仕掛けに行くから覚悟するよーに by麻美

注：今回は雪子も公認なので訴えても無駄だよー >

などと書いてあった。それを速人たちにも伝えると、

「上等じゃないか、どこでどんなイタズラが入るか見ものだね。さあ、行こうか。」

速人がそう言って裕也たち一行は山の中へ入っていった。

**第11話：早朝ドッキリ&オリエンテーリングイベント発生（後書き）**

さあ、オリエンテーリングで山の中へ。

裕也たちの敵は自然or動物or麻美!?

次回に続く!

意見・感想などお待ちしております。

## 第12話：オリエンテーリングへ（前書き）

昨日までに1500Hitを達成しました。連載開始からわずか10日での史上最速記録です。楽しみにしてくださいる皆様に感謝です。

## 第12話：オリエンテeringへ

山の中に入って少し歩いたところで、裕也は目の前の地面が少し光っているのに気づいた。わずかな落ち葉でごまかしてあるようだが、光が漏れていてすぐに気づいた。

「早速第一のトラップか。でもあれはわかりやすすぎだろう。」

裕也がそう言って光っているところに石を投げ込む。すると、地面が強く光り輝き、その光が収まると、地面が光っていた場所には巨大な落とし穴が開いていた。

「わかりやすくてよかったな……あれは絶対危ない。麻美さん、こんなトラップをいくつも仕掛けてるといふことか……？」

裕也が冷や汗をかきながら速人たちにそう言って落とし穴の横を通り抜ける。

その様子を上空から見ていた麻美は

「へえ……なかなかやるわね。でもこんなのまだまだ序の口。ふふつ、どこまで楽しめるかな？」

などどつぶやいていた。

先へ進んだ裕也たちは、どこに麻美の罠が仕掛けられてるかわからないので警戒しながら歩いていた。

と、そのとき。「カチリ」と音がした。

「ん？なんだ？」

速人が足元を見ると、誰も気づかなかったスイッチのようなものを踏んでいた。と、ゴゴゴ……という音とともに前方から馬鹿かい岩が転がってきた。

「ちよつと待て、これはいくらなんでもやりすぎだろー！？」

裕也たちは叫びながらも来た道を走り出す。

「よし、さっきの落とし穴に引つ掛ければとまるはず！」

裕也が先頭を走り、さっきの落とし穴を発見すると、走る勢いそのまま落とし穴を飛び越え、着地の瞬間にごろごろと転がった。速人や豪たちも同じように飛び越え、振り向くと、大岩が落とし穴にはまり、穴がきれいにふさがっていた。

「はあ、はあ……麻美さんはいったい何を考えているんだ？オレたちを殺す気か！？」

裕也の叫びがむなしく山の中に響き渡った。と、そこに再び麻美からのメール。

<今の大岩は私じゃないわよ。上から見るとさっきからものすごい速さで黒い影が移動してるから、それが仕掛けたトラップじゃないかな？ちなみに、私が仕掛けたのはあとひとつだけだよ>  
>  
と書いてあった。それを見せると、

「麻美さんが見たという高速で移動する黒い影、そしてこの大岩……この山の中には忍者でもいるのか？」

速人がそうつぶやく。

「まあ、気にしたってしょうがない。さっさと進んでこのオリエンテーリングを終わらせよう。」

裕也が携帯をしまつて再び歩き出した。

さっきのスイッチのあった場所を通過し、さらに先へ進むと、先にスタートした班が立ち止まっていた。

「どうしたの？」

裕也がたずねると、

「いや、前のほうに馬鹿でかいクマがいて進めないんだ。1回だけそのまま素通りできないかと思って進んでみたんだけど、近づくとこつちをにらんで襲い掛かってきそうだから引き返したんだ。追いかけてくるかと思っただけでそうでもなくて、でも進めなくてこうしているというわけなんだ。ここさえ抜ければゴール地点が近いはずなんだけど……いかんせんあのクマが……」

裕也たちのクラスのもうひとつの男子班の一人がそう答える。

「とりあえずどんなのを見ないことにはどうにもできないし、ちょっと見てくる。」

裕也たちがそう言って先へ進み始める。

「気をつけるよ。かなり獰猛どうせつそうに見えたぞ。」

クマ情報を話してくれたやつがそう言って見送る。

「なるほど、アレか……たしかにでかい。」

速人が遠目から見てそう言った。

「なるほど、そういうことか。」

裕也が何かに気づいたようにそう言った。

「北方、なにかわかったのか？」

速人がそうたずねる。

「ちよつと冷静に考えればわかることだけど、普通こんなところにあんな馬鹿でかいクマがいると思うか？ 仮にいたとしてもとつくに射殺されている、そうは思わないか？」

裕也が自分の考えを述べる。

「そうか、つまりアレは」

速人たちも気づいた。

「そう、麻美さんの最後のトラップ。おそらく幻だろう。ためしに通り抜けてみる。」

裕也がそう言ってクマに近づいていくと、たしかに情報どおりにらみつけて襲い掛かってきそうな雰囲気だ。だが、裕也が足元に落ちていた石を拾って思いきり投げつけると、クマの体を突き抜けて谷底のほうへ石は落ちていき、クマの姿は消滅したのだった。

クマなんていなかった、幻でも見たんじゃないか、と裕也が足止めされていた連中に伝え、一行は無事にオリエンテーリングを終えることができた。

その後、本当に雪子がイタズラの許可を出したのか気になって裕

也が聞いてみると、実はそんなことはなかったことが判明し、仕掛けたトラップをすべて突破されてがっかりして帰ってきた麻美を鬼の形相の雪子が迎えたのは言うまでもない。

ちなみに、お仕置きされたあとの麻美に話を聞くと、大岩も麻美が仕掛けたトラップで、麻美が見たという黒い影も狂言だったことを白状したので、裕也がきっちり告げ口して麻美に対する雪子のお仕置きが増えたらしい……………

## 第12話：オリエンテーリングへ（後書き）

下手すれば死ぬかもしれないようなトラップを潜り抜け、オリエンテーリングを終えた裕也たち。

さて、次はどんな騒動が待ち受けているのか？

### 第13話：午後の自由時間 爆睡裕也と速人たちの企み

オリエンテーリングで疲れ果てた裕也たちは、昼食の後が自由時間にあてられていたので、そのまま各自の部屋で倒れこんでいた。

一応この自由時間はオリエンテーリングで協力し合ったことで少し仲良くなっただろうからここでもっと親睦深めとこう、みたいな感じで作られた自由時間だったが、全員それどころではないようだった。

そこへ再び迫り来る黒い影　もとい麻美。

「裕也くんってば、余計なこと告げ口するからまだ身体が痛いし冷たいし……報復してやるうかしら。」

さつき雪子に追加でお仕置きをされたばかりだというのに、麻美はなおもちよつかいを出す気らしい。

ちなみに、雪子の「お仕置き」はいくつかあるようだが、今回は麻美を凍らせて、氷でできたハンマーでぶん殴った……らしい。凍ってるから冷たいし、冷たいから痛みも倍増ということで、たいしたことないように見えてかなり痛いようだ。

裕也たちの部屋の前までやってきた麻美は、扉を少しだけ開けて中の様子を伺う。

「寝てるのか……チャンスだけど、やっぱ今日はやめとこ。起きてるところに仕掛けて驚くさまを見るほうが面白いしね。」

麻美はそうつぶやくと、扉を閉めて立ち去った。

「おーい、起きろ。早く起きないとまた寝起きドッキリしかけるぞ」

裕也はその声で飛び起きた。もう寝起きドッキリはいやらしい。目を覚ました裕也が周りを見ると、すでに日が暮れていて、時間は夕方6時を回ろうとするころだった。起こしてくれたのは今朝方寝起きドッキリを仕掛けた上級生だった。

「よく寝てたね。と、他の連中の姿が見えないが、どこへ行った？」裕也を起こしにきた上級生が部屋に裕也しかいないのに気づいてそう言った。

「いや、ずっと寝てたからわからないです。」

裕也があくびをしながらそう答えたとき、速人、豪、賢、靖、貴之が戻ってきた。

「5人そろって、どこ行ってたの？夕食の時間だってよ。」

裕也がたずねると、

「ふっふっふ、秘密だ。けどまあ、そのうちわかることだ。」

速人がそう話し、

「今日こそは、今日こそは……オレたちの野望を達成してやる……」豪がそうつぶやいていた。

「今日こそは、ってまさか風呂場に何か仕掛けでもしたとか？」

裕也が半ば呆れつつそうたずねる。

「うおっ、声に出していたか！？ま、まあ、そんな感じた。上が氷で覆われているのは昨日から変わってなかった。だが下なら見つかる可能性は低いと考えたんでな。あとは風呂の時間のお楽しみだ。

雪子さんたちには絶対言うなよ。」

豪が声に出していたことに驚き、計画の一部を話し、裕也に口止めをした。

「まあ、それはかまわないよ。どっちにしる関わるつもりはないし。というかオレが計画に加担したことがばれたらただじゃすまないだろうからね。そろそろ食堂行こうぜ。」

裕也は笑ってそう話し、6人は食堂へ向かうのだった。

夕食を終えると、速人たち5人はこの後温泉で実行する計画の詰めを話し合っていた。その過程で貴之がヘッドホンを耳につけた。

「田野口くん、いったい何をやってるの？ずいぶん大掛かりだけど……」

裕也が近くによつてたずねると、

「聞いてみればわかる。」

貴之は短くそう言うと、裕也にヘッドホンを渡した。裕也が耳に当てると、

「ねえねえ、この後どうする？」

「まだお風呂入るには早いよね〜」  
などといった声が聞こえてきた。

「これは……盗聴器ってやつか？」

裕也が貴之にたずねると、

「ああ、そうだ。ついでにこうすると……」

貴之が手元でなにか操作すると、ザザツという雑音の後に、音声が切り替わった。

「まったく、麻美さんは最近イタズラの迷惑度が上がってきてないかしら？」

「……雪姉のお仕置きに慣れてきちゃってるからじゃないの？」

「まあ、それよりも裕也くんの同級生たちだ。昨日、のぞきをしようとして、ユキに見つかって制裁食らってたけど、まだ懲りてない気がするんだよね〜」

雪子、薫、彩の声が聞こえてきた。

「おいおい、よくあの部屋に盗聴器なんて仕掛けられたな……ばれたら半殺しじゃすまないかもしれないぞ。」

裕也がヘッドホンを外して貴之にそう告げる。

「大丈夫だ。プロ級の盗聴器バスターがない限り見つけるのは難しいはず。それで、こうすれば……」

貴之がまた手元でなにかボタンを押すと、ヘッドホンではなく横

においてあったスピーカーから声が聞こえ始め、さらにクラスの子と雪子たちの部屋、両方の声が聞こえるようになっていた。

時刻は夜8時を回ったころ、

「そろそろ温泉行こうか。」

まず女子たちがそう言うって部屋から出て行くような音が聞こえてきて、それから間もなくして、

「温泉行きましようか。もし昨日の男性たちがまたなにかやらかすようであれば、見つけた人の好きなようにしちゃいましょう。麻美ちゃんだったら今回に限りイタズラし放題でいいわ。」

雪子がさらっと怖いことを言っつていつの間にか部屋に戻っていた麻美や他の2人とともに部屋を出て行く音が盗聴器を通して聞こえてきた。

「よし、みんな、作戦決行だ。温泉行くぞ。」

速人が立ち上がり、作戦を実行する5人と一人だけ我関せずな態度の裕也は部屋を後にした。

途中で隣の部屋の連中に声をかけると、嬉々として速人たちの作戦に同調し、みんな温泉へ向かうのだった。

## 第14話：Let's温泉!その2

で、裕也たちは昨日と同じように露天風呂に来ていた。風呂場の入り口で女性陣とばったり会った裕也たちは、

「あれ、みんなもこれから?」

と実に白々しく話しかける。すると、

「今日、もしかた覗こうとしたのがわかったら昨日の制裁じゃ済まないわよ。わかってるわよね。」

雪子が裕也にそう耳打ちした。顔は笑ってるが目がやはり笑っていない。

「は、はい、わかりました。」

裕也は多少身震いしながらそう答えるのだった。

「で、あんなふうに警告されたけどそれでもやるのか?」

脱衣所に入ったあと、裕也が速人たちにひそひそ話でさっきの警告を伝える。

「要はばれなければいいってことだろ?今日は大丈夫だ、よほど注意深く見ないと見つからない、それでいてアングルは最高っていう場所から覗くからな。豪、道具の準備のほうはどうだ?」

速人があっけらかんとそう言い、豪にそうたずねる。

「OKだ。小型でも湯気に負けないビデオカメラ。録画中の音も消せるまさに犯罪スレスレのブツをな……」

豪が服のポケットから小さなビデオカメラを取り出してそう話す。

「よし、いざパラダイスへ向けて作戦開始だ!」

速人の号令とともに裕也以外が「おーっ」と小さく返事をして浴室へ突入していく。

しかし、作戦開始とはいえ、みんな体を洗うことは忘れていなか

った。一部暴走して先に覗きに走ろうとした者もいたが、速人が制止し、  
「気をつける。向こうもきつと警戒してるはずだ。その証拠に、向こうからまったく声が聞こえてこない。」  
そう言ったとおり、女風呂のほうからは体を流すような水音しか聞こえなかった。

とりあえず暴走しかけたやつも含めておとなしく体を洗い、裕也が湯船に体を沈めた直後、速人たちが動き出した。

「とりあえずオレと豪が実行役だ。撮影した映像はあとでコピーして回してやるから、ほかのやつはカモフラしてくれ。」

速人が小声で指示を出し、それにみんなが頷き、動き出した。

まずカモフラ役数人が女風呂に聞こえるくらいの声で騒ぎ、注意を壁の上に向けさせる。ちなみに、壁の上は昨日雪子が氷で覆っていたが、すでに溶けていた。

その隙に速人と豪が壁の端っこのほうへ素早く駆け寄り、壁をガサゴソいじくる。すると、壁に小さな穴が現れ、そこに豪が素早くカメラのレンズを差し込み、録画を始めるボタンを押す。

最初こそ順調に女風呂の映像が映し出されていたのだが、突如として画面が暗くなり、不思議に思った豪がレンズを覗き込んだ直後、顔が青ざめた。

それに疑問を抱いた速人がレンズを覗き込む。すると同じように顔が青ざめ、慌てて録画を止め、カメラを引き上げた。

だが、その直後、4つの影が仕切りの壁を飛び越えて男子側に着地した。その影は言うまでもなく雪子たちだった。しかも当たり前だが4人とも怒っている。

「あなたたち……昨日のぞきを見つかって、さっきも警告したはずなのに、それでもやるってことは、覚悟はできてるってことではないのよね？」

雪子が一步前にながらそう言う。

速人と豪はわずかずつ後退していくが、そのたび4人はじりじりと接近してくる。

やがて逃げ場を失った速人と豪は、決死の覚悟で4人の包囲網を突破しようとするが、彩が足を引っかけたバランスを崩させ、麻美が魔法で動きを止めると同時に宙に浮かす。そこに待ってましたとばかりに雪子が昨日より強力な吹雪を放つ。薫は様子を見ていた。

至近距離で受けた速人と豪はともかく、湯船で成り行きを見守っていた裕也や、逃げようとしていたクラスメートたちも湯船のお湯ごと凍結していた。

「あのー雪子さん？オレ関係ないんですが、なぜ巻き添えにされるんですか？」

裕也が身動きできないまま雪子にたずねる。

「目の前で覗きという犯罪行為が行われているにも関わらずそれを止めなかった時点で同罪よ。これ以上ゴチャゴチャ言うつと薫ちゃんキれるわよ。そうならたらどうなるかわかるでしょ？」

裕也の脳裏に入学式の日の騒動がよみがえる。と同時に、

「ごめんなさい。」

と裕也は謝っていた。

雪子は速人たちの氷を溶かすと、

「もう二度とのぞきはしないって誓えるかしら？」

2人の胸元に手をあててたずねた。断れば今度は心臓ごと凍らすぞと言わんばかりの行動だった。

さすがにこれには2人も震えながら謝り、ビデオの録画テープを引渡し、二度としないと誓うのだった。

## 第14話：Let's温泉！その2（後書き）

やはり雪子たちは怖かった。妖怪を甘く見るところという目に遭うってことで。

さて、次回は「温泉旅館といえば？」という問いに100人中80人程度は出てくる、（作者脳内調べ）もうひとつの定番のお話。お楽しみに〜

第15話：温泉といえば卓球でしょ、でもこんな展開あり!?!? (前書き)

調子がいいので再び1日2話投稿といきますか。

第15話：温泉といえば卓球でしょ、でもこんな展開あり!?

「うう……ひどい目にあった……」

温泉から出たあと、裕也は入る前より疲れていた。

あの後、「なぜわかったのか」という速人の質問に対し雪子たちは、

「女のカンをなめちゃダメよ」  
とだけ答えたのだった。

風呂から出てしばらくすると、裕也もある程度体力が回復してきた。と、そこに、

「おい、北方ー。温泉旅館のもうひとつの娯楽をやりに行こうぜ」。

一番こっぴどくやられたはずの速人が元気に戻ってきた。

「もうひとつの娯楽?というと、卓球か?」

裕也が立ち上がりつつそう返す。

「ああ、今台を確保して来たところだ。雪子さんたちもいるぞ。みんなでわいわいやろうじゃないかってことでお前も呼びに来たんだが、大丈夫か?」

速人がそう話し、裕也を誘う。

「ああ、大丈夫だ。卓球は昔やってたからそこの温泉卓球とはレベルが違うぜ。覚悟しとけよ。」

裕也が笑いながら速人とともに部屋を出て行くのだった。

「うるあつー!」

スパアアアン!という音が響き、裕也の渾身のスマッシュが速人側の台を打ち抜く。

「くそつ、本当に強いな……」

今のスマツシユでゲームが終わり、すっかり息切れした速人が台から離れつつそうつぶやく。

「へえ、裕也くんに意外な特技が……」

などといったるのは裕也たちの隣でやっていた雪子たちだった。

こっちはまさに「温泉卓球」といった具合でポコン、パコン……とのんびり打ち合っていた。

その後も裕也は次々にクラスメートたちを倒して行き、最後に残ったのは貴之だった。

「最後はオレか。北方、ここまで圧倒的に素人であるみんなを退けてきたが、経験者がお前だけとは思うなよ。」

貴之はそう裕也に宣戦布告した。

貴之の宣戦布告どおり、裕也vs貴之のゲームは激しいラリーの応酬の好ゲームになっていた。本来11点1セットのゲームだったが、10-10でデユースに突入してはや数十分、スコアも35-35になっていた。ボールを打つ音も、普通の温泉卓球なら「ポコン、パコン」なのだろうが、この二人に関しては「ドガガガツ」とか「スパアア」とかもものすごい音になっていた。

「ぜえ、はあ、なかなかやるな、田野口。お前も経験者だったとはな……」

「はあ、はあ、お前もな、北方……正直経験者とはいえここまで強いとは思わなかった。オレは高校の県大会では敵なしだったからな……」

二人ともすっかり息を切らしながらここまでの健闘をたたえあった。

「だが、そろそろ」

「決着つけようぜ。」

二人が今一度集中力を高め、裕也がサーブを放つ。貴之もらくらく返すが、そこにカウンターで裕也が強烈なドライブスマツシユを

放つ。

「うおおおっ!!」

貴之の雄たけびが響き渡り、裕也のドライブスマッシュを返す。あまりに速すぎて二人以外にはボールが見えていなかった。

「いい加減、くたばれえっ!!」

裕也がそれをさらに返し、もはやただの暴れ球と化したボールは貴之側の台で一度バウンドすると、返そうとした貴之のラケットを弾き飛ばし、床にめり込んで止まった。36 - 35、裕也マッチポイント。

「はあ、はあ……これでオレのマッチポイントだ……」

スマッシュを決めた裕也がそうつぶやく。

「ま、まだ試合は終わってねえ……最後に勝つのは……このオレだ……」

貴之もまだ闘志が消えたわけではないようで、そう言いながらサーブを放ってきた。だが、すでに疲労がピークに達していたようで、試合開始当初の勢いはなかった。

「これで、終わりだああああっ!!」

スパアアーン!!という音がして裕也のリターンエーススマッシュが炸裂し、死闘に幕を下ろした。

「ぜえ、はあ、ナイスゲーム、田野口。」

「はあ、はあ、それはお互い様だ、北方。」

二人は握手で互いをたたえあうと、周りから歓声が上がった。

「まさか目の前でプロ級の試合が見れるとは思わなかったぞ。すげーな、田野口、北方。」

誰かがそう言ったところに、

「まったく。これは勧誘のしがいもあるというものです。」

拍手をしながら入ってきたのは、アドバイザーの<sup>ふくだ</sup>上級生だった。

「私は聖都大の卓球サークル会長・福田といひます。まあ、名前だけはアドバイザー紹介で知ってるはずですがね。」

大学の卓球サークルの会長といった福田は、さらに続けて、

「北方裕也くん、そして田野口貴之くん。二人をわが卓球サークル  
《ピンポン・スマッシュャーズ》へ勧誘します。すぐに返事を出せと  
は言いませんので、もし入る気になってくれたなら体育館の第2小  
体育室へ来るか、私の携帯<090- × 1 × >まで電  
話ください。もちろんそこで見ている人たちも歓迎しますよ。では。」

「福田はそう告げると、立ち去っていったのだった。」

第15話：温泉といえば卓球でしょ、でもこんな展開あり！？（後書き）

本来温泉旅館の卓球は素人同士の娯楽にもかわらず、一部では経験者同士の死闘に発展した。

次回、温泉卓球・後編。

再び死闘の幕が上がるうとしていた

注：この卓球編の間は基本的に雪子たちはほとんど暴走しません。ご了承ください。

## 第16話：温泉卓球後編 死闘再び

前回に引き続き卓球の話。

貴之との死闘を制した裕也は少し休憩を取り、戻ってくるとさっきまでいなかった女子たちが来ていた。

そこで裕也は女子にも経験者がいるのに気づき、一段落したところをみて近寄ってみると、智子と静香だった。

「へえ、二人とも卓球得意なんだ。意外だな。」

裕也がそう話しかけると、

「それは北方くんだってそうだよ。あまりスポーツとかやらなさそうなのに実は卓球うまいなんて。聞いたよ、さっき田野口くんと死闘を繰り広げたんだった？」

智子が笑顔でそう話す。

「ああ、37-35でオレが勝ったが、まさに死闘と呼ぶにふさわしい激戦だった。今までそんな点数になったことないからね。」

裕也も笑って話すと、

「今はもう体力回復した？」

智子が急にまじめな顔になって裕也にたずねる。

「ああ、大丈夫だよ。おつ、勝負する？」

裕也も智子の意図に気づき、そう持ちかける。

「ええ、やりましょうよ。私は高校時代女子の部で全国ベスト16よ。」

智子が実績を披露し宣戦布告の代わりにする。

「オレは一応全国行ったが男子の部でベスト64止まりだな。ただ、負けないぜ。」

裕也もさっきは言わなかった自らの実績を披露し、宣戦布告にする。

「」「いざっ、勝負!!」「」

二人の声がそろい、再び死闘の幕が上がるうとしていた。

「対女子用必殺サーブ、ジャックナイフ!!」

裕也がそう叫びながら放ったサーブはかなりありえない回転を見せ、返そうとした智子のラケットの周りを1周し、智子の腕の周りをすべるように移動していった。そして肩のところまで行って床に落ちた直後、智子の右腕の部分の服がナイフで切り裂かれたように破れていた。

「な、なんなの今のサーブ……服を切り裂くほどの回転なんてそんなバカな……」

智子は今の1本でかなり驚きを隠せない。

「いいぞー北方ーそのままストリップショーだー!」

速人がのんきにそう叫んでいる。と、その直後、智子の服が元に戻った。

「裕也くん、女性の服を破くのはどうかと思うよ?私のイタズラよりたちが悪いと思うんだけど、どうかしら?」

麻美が魔法で智子の服を元に戻しながらそう非難し、速人はまたしても雪子に制裁を受けていた。

「うっ……」

その非難を受けて裕也が周りを見ると、女子全員がブーイングを飛ばしていた。

「わかった、わかりました。ジャックナイフは使わないよ。……たぶんね。」

裕也がそう言い、1-0で裕也リードから試合再開となった。

その後、またも死闘と呼ぶにふさわしいような試合展開となり、またもデュースにもつれ込み、激しいシーソーゲームの果て、スコアは31-30、裕也のマッチポイント。

「ぜえ、ぜえ、2試合続けてこんな展開は疲れるっつの……」

裕也はすっかり息が上がり、苦しそうだ。

「はあ、はあ、高校時代は男子にさえも完封で勝利したことあったのに、北方くんは強いわ……でも、まだ終わるわけには行かない！」

そう言っつて智子が放ったサーブは、紛れもなく最初に裕也が使ったジャックナイフだった。

「まさかオレのサーブを模倣できる人材がいるとはな……だが、オレ自ら編み出したこのサーブ、対処法くらい身に着けているっつの自滅しな！」

裕也は感心しつつ、ジャックナイフを切り返した。より複雑な回転になったジャックナイフは智子のラケットを弾き飛ばし、おそらくパジャマかなんかだったのだからTシャツを切り裂いて床に落ち、死闘に幕を下ろした。

「言っつておくが、これは井上さんが自ら使ったジャックナイフであつて、オレが使ったわけではない。だからこれも自業自得だ。」

裕也はふらつきながらそう言い、その場に座り込んだ。

服を切り裂かれて呆然としている智子に対し、理性を失った男子たちが襲いかかる寸前までいったが、観戦していた他の女子が総力を挙げて智子を守り、雪子たちも男子を抑える役に回ってくれたので、智子は無事だった。麻美がまた智子の服を直して卓球大会は幕を閉じ、親睦旅行最後の夜は更けてゆくのがあった。

第16話：温泉卓球後編 死闘再び（後書き）

えーと、よい子はジャックナイフをマネしちゃいけません（いや、できないだろ）

これで2日目も終了、あとは3日目を残すのみ。

といっても帰るくらいしかないけど……

## 第17話：帰宅早々トラブル発生（前書き）

おかげさまで総アクセス数が2000を突破しました。まだまだがんばるので応援よろしくお願いします。

2泊3日の旅行編もようやく最終日。

あとは帰るだけだが……

## 第17話：帰宅早々トラブル発生

3日目 最終日の朝が来た。今日は昨日の寝起きドツキリの恐怖もあつて誰も寝坊することなく起きていた。

ごく静かな朝食を終え、そのまま荷物をまとめて旅館を出ようとしたとき、裕也は廊下で同じように帰りの荷物を持って歩いてくる雪子たちとばったり会った。

「あれ、みんなもこれから帰り？」

裕也がそうたずねると、

「ええ、教職員の方と交渉して一緒にバスに乗せてもらえることになったの。」

雪子はそういつものニコニコ顔で話した。

「あーそうですか、一緒にバスで……ってえええええ！？」

危うくそのまま流してしまいそうになったがあわてて突っ込む。

「なanananんで一緒にバスなんですか！？ていうかここまで来た交通手段はどうしたんですか？」

裕也はかなり動揺して声が上ずっている。

「ここまで来たのは麻美ちゃんの力。でも帰りはなぜかそれが使えないらしいのよ。だから、教職員の方と交渉してこうなったのよ。バスの座る席もあるから別にいいでしょうってね。」

雪子はそう説明する。

「はあ……もう決まったことは仕方ないですね。でも、バスの中で暴れるのだけはやめてくださいね。頼むからおとなしく過ごしてください。」

裕也はため息をつきつつそう話すのだった。

裕也たちを乗せたバスは一路大学へ向けて走り出した。一応バスにカラオケが搭載されているので、中には適当に曲を入力して歌い出す人もいたが、速人のように寝始める人が出てきたのであまり盛り上がりならず、やがて歌う人もいなくなつた。

裕也も寝たかったが、雪子たちの暴走が気がかりで寝るところではなかった。と、一番後ろの長椅子に座っている4人があまりに静かなので裕也が振り向いてみると、麻美以外みんな寝ていた。

と、麻美と目があった。すると、

「みんな寝ちゃった。よほど疲れてたんだね。どうせならみんな寝かしとく？」

と小声で麻美が言ってきた。

「そうですね。結構寝てる人多いですし、オレも寝ますかね。」  
と裕也が答えると、

「じゃあ、おやすみなさーい」

麻美がニコニコしながらそう言った直後、裕也は猛烈な眠気に襲われてブラックアウトしたのだった。

裕也が目を覚ますと、ちょうどバスが大学に着いたところで、他のみんなも起きてバスを降りるところだった。

「ふあ……よく寝た。それにしても麻美さん、確か寝る直前に何か話してましたよね？途中から覚えてないんですけど、もしかしてなんかしました？」

裕也がずいぶんとニコニコして機嫌のよさそうな麻美にたずねると、

「うん、したよ。みんな疲れてるみたいだったからゆっくり休んでもらうために魔法で眠らせたの。ゆっくり休めたでしょ？」

麻美はそう話した。

「そっか。まあ別に今回は誰にも迷惑かかってないどころかいいとをしたんですね。」

裕也も笑いながらそう話し、このまま解散ということで雪子たちとともに5人でアヤカシ荘のほうへと歩き出したのだった。

雪子たちと各部屋の前で別れ、裕也が部屋に入った直後、他の4

人の部屋から悲鳴が上がった。

裕也があわてて飛び出し、とりあえず一番近い彩の部屋へ向かうと、部屋が荒らされていた。

「ドアが開いてたからおかしいなとは思ってたんだが、鍵のかけ忘れだと思つて中に入つたらこのザマだ。他の3人のところからも悲鳴が聞こえたからおそらく空き巣に入られたな。裕也くんのところは大丈夫だったか？」

彩がそうたずねる。

「ええ、鍵もちゃんとかかかってましたし、何も問題なしです。」

裕也はそう答えた。そこに一階に住む3人もやってきた。

雪子たちの話も聞いた上で被害をまとめると、4人とも鍵をピッキングかなにかで開けられ、室内にあつた現金などの金目のものはまったく手を着けず、それぞれの下着などが盗られていた。

「つまり、どこかの変態が表札を見て女性である4人の部屋のみを荒らしたってことだな。」

裕也がそう締めくくると、

「ぜってー犯人見つけるぞ。アタシらの部屋を狙ったこと後悔させてやる。」

彩が怒りに満ちた表情でそう叫び、

「そうね。存分に後悔してもらいましようか。誰か、いい方法あるかしら？」

雪子も静かな怒りを秘めつつ、そうたずねる。

「そういう変態の類であれば、きつと味を占めてまたやってくると思うんだ。だから誰かの部屋に罠用の下着かなにかを干しておき、可能であればそれに罠をしかける。って方法はどうですかね？」

と裕也が案を出す。

「ああ、それいいな。罠を仕掛けるのは麻美が適任だな。みんな、これでいいか？」

彩がその案を採用し、罠を仕掛ける役に麻美を任命する。

「ええ、いいですよ。罠のほうも任せてください。そういうのは大得意ですから。」

麻美が賛成し、特に反対意見も出なかったので裕也の出した作戦で行くことになった。

すぐさまみんなが今回の旅行に持っていった中で使わなかったものを各部屋に干し、一つずつ麻美が罠を仕掛けていく。

罠そのもので痛めつけることも可能ではあったが、今回はあえてそうせず、干してある下着が物干しから外れた瞬間、大きな警報音でみんなに知らせる罠にしておいた。

その日の夜、早速事態が動いた。

裕也が夕食を食べてのんびりしていたとき、突然外で大きな警報音が鳴り響いた。すぐに部屋から飛び出し、現場に急行すると、警報音に驚きつつもちやつかりそのブツは握りしめて逃げ出す男の姿が目に入った。

「待ちやがれ！」

裕也が叫んで追いかけて始めると、

「待てと言われて待つヤツがいるかボケ！」

逃げる男がそう叫び返す。と、雪子たちも飛び出してきて、裕也と一緒に追いかけた。

街中を舞台にした鬼ごっこ。しかしなかなか距離が縮まらない。

ついに麻美がしびれを切らし、なにかつぶやく。すると、犯人がいきなりこけた。すぐに起き上がってまた走り出すが、麻美がなにかつぶやくとまたこけた。

「やっと捕まえた。観念しなさい。」

こけた状態のまま取り押さえられた犯人の男は、そのまま私的制裁<sup>チ</sup>まがいのことをされ、雪子たちは盗まれたものもきっちり取り返したあとで警察に引き渡したのだった。

## 第17話：帰宅早々トラブル発生（後書き）

帰ってきて早々下着ドロをとっ捕まえるハメになったが、無事解決。  
でもリンチされたあの変態生きてるかな……？

## 第18話：サークル見学と麻美の怪しげなクスリ

親睦旅行から帰って数日後、裕也は勧誘を受けた卓球サークル《ピンポン・スマッシュヤーズ》に入るかどうか悩んだ末、とりあえず見学に行ってみることにした。

「えーっと、たしか体育館の第2小体育室って言ってたよな。あ、あそこだな。」

第2小体育室（卓球場）とプレートが掲げられた部屋に近づくと、卓球のボールが弾む軽快な音が聞こえてきた。

「失礼します。見学させてもらってもいいですか？」

裕也がそう挨拶して中に入ると、

「おお、北方くん。来てくれたのか。このサークルに入ってくれるのか？」

出迎えたのは裕也を勧誘した張本人、福田だった。

「いえ、とりあえず見学させてもらって、それから考えたいと思います。」

裕也がそう答えると、

「おつ、見学とはいってもちゃんとラケット持ってきてるじゃないか。どうだい、軽くここにいる連中と試合でもしてみないか？」

福田は裕也がラケットを持っているのに気づくと、そう提案してきた。

「お、面白そうじゃん。会長おすすめの期待の新人の実力を見せてもらおうぜ。」

上級生のひとりが福田の提案に乗った。

「先輩方がいいのであれば、断る理由はありません。よろしく願いします。」

そんなこんなで一試合だけ行われることになり、サークル内実力No.1で副会長を務める宮田<sup>みやた</sup>が裕也と試合をすることになった。

ちなみにさつき福田の案に乗ったのはこの宮田である。

「11点1セットマッチ、北方サービス、プレイ！」  
審判は福田が務めることになり、試合の幕が上がった。

そのころ、アヤカシ荘103号室、麻美の部屋では……  
「よし、あとはこれを入れれば完成ね。2週間近くかかったけどや  
つとできたわ。」

部屋の隅に置かれた普通より少し大きめの鍋でなにか煮込んでい  
た。2週間近くと言っていることから、裕也が挨拶に来たときも煮  
込んでいたものだろう。

麻美が小さなビンから何かの液体を鍋にたらした瞬間、ボンツと  
言う音とともに鍋が煙を噴いた。

「ケホツケホツ、完成ね。飲んだ者に24時間限定で魔力を与える  
秘薬。実験台は裕也くんが適任かな。さて、どんな使い方するかし  
らね……」

麻美がコントのように煙を吐き出しつつも、怪しげな実験計画を  
密かに進めるのだった。

そんな計画を知る由もない裕也は、宮田との1セットマッチで8  
- 10と追いつめられていた。

「まあ、このオレから8点も奪えれば上出来だ。そろそろ決着をつ  
けさせてもらうよ。」

宮田は裕也にトドメを刺すためのサーブを放つ。  
「チャンスはリターンエースただ一つ！この一撃で決まらなければ  
オレの負けだ！食らえええ！！」

裕也が狙いすましたリターンスマッシュを放つ。決まったかに見  
えた瞬間、裕也側でボールが弾み、落ちた。

「甘いな、カウンタースマッシュだ。だが今の試合から判断するに、

現時点でおそらくオレ、会長に次ぐトップ3の実力はあるな。一応  
うちはサークルだが、正式な大会にも出場することができるように  
なってる。今までの最高は個人ではオレが関東ベスト4、会長が関  
東ベスト8だ。そして、団体は関東ベスト4とまだ全国は未知の領  
域なんだ。だが君ともうひとり会長が目をつけたのが入ってくれ  
ば全国をねらえるかもしれん。ぜひ入ってくれ。」

宮田はそう話し、裕也に入ってくれと頼んだ。

「わかりました。こんなオレでお役に立てるなら。正直宮田さんとの  
試合が面白かったし、宮田さんを倒すっていう目標もできたので、  
喜んで入らせていただきます。」

裕也はそう話し、卓球場を後にした。体育館を出ると、ちょうど  
いい具合に暗くなり始めていた。

裕也が帰宅すると、部屋の前で麻美が待っていた。

「おかえり、裕也くん。ジュースあるけど、よかつたら飲む？」

麻美がそういってペットボトルを差し出すと、

「また何か仕掛けてるんじゃないですか？なんとなくそんな気がし  
たんですが……」

裕也は疑り深く、ペットボトルを受け取らなかった。

「ギクツ……と、とにかくゴチャゴチャ言わずに飲めばいいの！別  
に毒じゃないから。」

麻美はわかりやすく動揺を見せると、強気に出て一気に裕也の懐  
に潜り込み、無理やりペットボトルの中身を裕也の口に含ませた。

ゴクン

「!?!?」

あまりに突然のことに驚き、裕也は口の中に流し込まれた謎の液  
体を飲み込んでしまったのだった。

## 第18話：サークル見学と麻美の怪しげなクスリ（後書き）

サークルで敗北の悔しさを思い出した裕也はサークルに入ることを決意した。

ってか、変なクスリ飲まされて裕也はいったいどうなる？

**第19話：クスリの副作用はアヤカシ荘の危機を呼ぶ（前書き）**

麻美の作った謎のクスリを飲まされた裕也。

果たして彼の運命はいかに？

## 第19話：クスリの副作用はアヤカシ荘の危機を呼ぶ

「うっ……」

「あ、気がついた？」

「どうやら気を失っていたらしい裕也が目を開けると、いつの間にか自分の部屋に運ばれていて、麻美がのぞき込んでいた。」

「えーと、麻美さんに何か変なもの飲まされてあまりに変な味に意識が飛んでたのか……あれはなんだったんですか？」

裕也がそうたずねると、

「あれは実験用のクスリよ。飲んだ人に24時間限定で魔力を与えろクスリ。つまりそれを飲んだ裕也くんは明日の夕方くらいまで魔法使いになったってことね。」

麻美はさらっとそう答えた。

「なんでまたそんな変なクスリ作ってるんですか……」

裕也がため息をつきながらそう言った。

「なんとなく実験してみたくなったの。いきなり魔力を普通のヒトが持ったらどうするか、ってね。」

麻美は悪びれる様子もなくそう答えた。

「まあ、飲んでしまったものは戻せないから仕方ないですけど、別にオレは何もしないですよ。そんないきなり魔法使いにされたってうまく扱えるわけがないんですから。」

裕也はそう話し、立ち上がると夕飯の支度を始めた。

「能力は私のコピーでそれを弱めたものだから結構簡単に扱えるけどな。でもまあ仕方ないか。ゴメンね、たぶん副作用とかはないと思うけど、なんかあったらすぐ呼んで。」

麻美はそう言うと、裕也の部屋から出て行った。

「よっ……と。おっし、完成だな。」

裕也は実は料理が得意で普段はこうして自炊している。一人で作

って一人で食べる寂しい食卓だが、ときどき彩や雪子たちが裕也の手料理目当てに食べに来るので特に寂しいとは思っていないようだ。今日は誰も食べにこなかったもので、一人で食べていたのだが、食べ終わって片付けようとしたときに異変が起こった。

「ぐっ!？」

ドクン、と身体の中で何かが脈打ち、その拍子に持っていた茶碗を床に落としてしまった。茶碗はガチャーンと大きな音を立てて碎け散り、あたりに破片が散らばった。

「な、なんだこれ……!? 自由が利かない……!?」

裕也が床に倒れてうめいていると、さっきの大きな音を聞きつけた麻美や雪子たちが駆けつけた。

「裕也くん、どうしたの!？」

雪子がまず駆け寄り裕也の身体をゆすぶる。

「う…あ……」

裕也はただうめいているばかりで何も答えなかったが、突然、

「うあああっ!!!」

ひととき大きなうめき声を上げると、雪子の身体が弾き飛ばされ、壁に激突した。

「まずいわ、魔力が暴走している……早く中和しないと危険だわ。」  
それを見た麻美がそう話す。

「どういうことなんだよ、裕也くんは普通の人間だろ?」

彩が麻美を問い詰める。

「ゴメン、話は後。ちよつと部屋に戻って取ってくるものがあるからその間裕也くんを抑えてて。」

麻美はそう言うつと裕也の部屋を飛び出した。

「抑えるつたつて、コイツは手がつけられないぞ……」

彩が改めて中を見ると、さっき裕也に弾き飛ばされた雪子は一度は立ち上がり再び裕也に近づいたが、もう一度弾き飛ばされ、壁に叩きつけられ気絶した。それを見た薫が果敢にも突撃をかけたが、やはり弾き飛ばされ、今は彩の横で目を回して倒れている。すでに

裕也の意識はないのか、白目をむいて倒れているが、近づけない何かを感じる。そこに麻美が戻って来た。

「これを飲ませれば落ち着くはず……彩さん、裕也くんの動きを封じるいい方法ないですか？」

麻美がそうたずねる。

「裕也くんは男だから本来はアタシの能力で簡単に動きを封じられるはずだが、今の彼の状態だとアタシの力じゃ到底足りない。雪子や薫なら遠距離でもいける能力だから心強いんだが……よし、アタシが突撃して裕也を力で組み伏せる。そしたらソイツを飲ませるんだ。後は頼むよ。」

彩はそう言うつと裕也に飛びかかり、組み伏せようとあちこち身体を動かす。だが、近づくものを無差別に攻撃する暴走状態の裕也が彩をも弾き飛ばそうとする。

「くそつ、なんつーでけえ能力だ。なんだってこんな状態になってやがるんだよ……」

彩もどうにか弾き飛ばされまいと踏ん張り、ようやく裕也の身体を押さえつけた。

「麻美、いまだ！」

そのタイミングを見計らって裕也に近づいた麻美が魔力の中和剤を飲ませた瞬間、裕也の身体から力が抜けた。

その後、事情を全て話した麻美はいつものように怒られ、お仕置きをされていた。今回は危うくこのアパートが消滅しかけたこと、一般人に魔力を与えるなどという無茶な実験を行ったなどの理由でこれまでで一番きついお仕置きを受けたらしい。というのも、普段はお仕置き役は雪子が一人でやってるが、今回は裕也も含めて全員がお仕置きに加わっていたからだった。

こうしてアヤカシ荘最大の危機(?)は過ぎ去り、夜は更けてい

く  
の  
だ  
っ  
た。

第19話：クスリの副作用はアヤカシ荘の危機を呼ぶ（後書き）

無事（？）事態は終息した。

中和したとはいえまだ副作用はあるかもしれない裕也の今後はどうなっていくのか？

## 第20話：妹の来襲 予告編

ゴールデンウィークを目前にしたある日の夕方、裕也の携帯にメールが入った。

<ゴールデンウィークにそっちへ遊びに行きます 惠理>

「惠理か……アイツこっちに來たら驚くだろうな。ご近所さんは妖怪だったなんて普通はありえないし。」

裕也はメールを見てそうつぶやいた。

惠理<sup>えり</sup>というのは裕也の妹で、年は裕也のひとつ下の高校3年生。

今度のゴールデンウィークに遊びに來るらしい。

「さてと、そろそろ卓球場行かなくちゃな。」

時間を確認するとサークル活動が始まる頃だったので、裕也は早歩きで卓球場へ向かうのだった。

「お疲れ様でした。」

この日の活動を終え、裕也は挨拶をして卓球場を後にした。

「お疲れ、北方。方向同じだし、一緒に帰ろうぜ。」

貴之がそう言って二人で並んで歩き出す。

裕也が《ピンポン・スマッシュャーズ》に入った翌日に貴之と智子が、そしてさらに翌日には静香が加入し、福田や宮田は「これなら関東を勝ち抜けるかもしれない」と喜んでいた。

「それにしても、福田さんや宮田さんは強いな。勝てる気がしないぜ。」

貴之がそう愚痴をこぼす。練習の最後はサークル内の練習試合で締めるのだが、毎日のように裕也や貴之は福田や宮田に挑み、負け続けているのだった。

「ああ、見学に行った日に宮田さんと初対戦したときは8点取れた

けど、今日は3点しか取らせてもらえなかったし、貴之は1点だろ？プライドも何もあつたもんじゃないよな。」

裕也も同調する。と、そこでアヤカシ荘の前に到着する。

「それじゃ、また明日な。頑張つて宮田さんを倒そうぜ。」

裕也はそう言つて貴之と別れた。

階段を上がる途中、裕也は彩の部屋から聞きなれない声が聞こえるのに気づいた。ドアの前を通過するときちよつと耳をすませてみると、どうやら彩が部屋に男を連れ込んでいるようだった。

（またナンパされてそのままつてところかな？ナンパした人、ご愁傷様……）

ドアに向かつて合掌しつつ、裕也は自分の部屋に入るのであった。

部屋で夕食を済ませた後、ふと気になつて外をのぞいてみると、彩が部屋から男を送り出すところで、がちりした体格の男がかなり疲れた様子でアパートから去つていくところだった。

すると、彩が裕也に気づいたらしく、

「あ、裕也くん。……もしかして、いやもしかしなくても見たよな？」

「ばつが悪そうに苦笑いしながらたずねてくる。」

「ええ、声も少し漏れてましたよ。やっぱナンパですか？」

裕也もつられて苦笑いを浮かべて彩の質問を肯定し、逆にたずねる。

「ああ、そうだよ。いつもはあまり手当たり次第に男を連れ込んでいくわけではないけど、今日のはひときわしつこくてな……ちよつとムカついたから誘いに乗つたふりしてうちに連れ込んで精気吸つてやったわ。でも実際かなり吸つたはずなのにまだあれだけ元気だとは思わなかつたけどな。」

彩が豪快に笑い出す。

「まあ、あまり一般人を襲つちやまずいんじゃないですか？ほどほ

どにしたほうがいいと思いますよ。」

裕也はそういって部屋に入るうとする。

「わかってるさ。一般人から精気を吸うことが高いリスクと隣り合わせにあることくらい。だけどアタシらはそういう種族。最低でも月に一回は男から精気を吸わなくちゃ生きていけない種族なんだ」

…」

ドアが閉まる直前、彩のつぶやきが裕也の耳にわずかに届き、裕也はある決意を固めるのだった。

第20話：妹の来襲 予告編（後書き）

妹からのメールでゴールデンウィークはどたばた度が増しそうな予感？

そして彩のつぶやきを耳にした裕也の決意とは？

## 第21話：裕也の決意と友の優しさ

翌日、裕也は彩の部屋のポストに一枚の紙を投下してから大学へ向かった。

その紙には、こう書かれていた。

“事情を知らない一般人から精気を吸うより、もっとオレを頼ってくれて構わないですよ。オレの体調がいいときなら吸っていいですから。”と。

しかし、肝心の彩はというと……

「ZZZ……………」

朝に弱いのか、ベッドの中で爆睡していた。

そんな彩が目を覚まして手紙を見つけたのはちょうどお昼で、裕也が速人たちと学食で昼食をとっているときに彩からメールが入った。

＜今起きたらなんか手紙が入ってたんだが、どうということなのか帰ったら説明してくれ。彩＞

そう送られてきた。メールを見ながら顔が緩んでいたのか、速人が、

「おい、北方？ずいぶん顔がにやけてるがいったい誰とメールしてるんだ？」

と裕也にたずねてきた。

「そんなにやけてたか？メールの相手は彩さんだよ。ちょっと聞きたいことあるから帰ったら部屋に来てくれってさ。」

裕也がそう答えると、

「なに、彩さんが部屋に來いだと？何の用なんだ？はっ、まさかあんなことやそんな……ぐふおっ!？」

速人が暴走して妄想をぶちまけはじめたので裕也はとりあえず一発殴って黙らせる。

「言っておくがみんなの考えてるようなことは一切ない。だけど、彩さんの事情を知ってるなら役に立てることもあるか。」

裕也はそう言っただけで昨日から今朝にかけてのことを話した。

「なるほど……」

意外と早く復活した速人がそうつぶやく。

「まあ、そういうわけでそんな手紙をおいてきた訳なんだ。」

裕也がそう話すと、

「事情はよくわかった。オレたちも協力しようじゃないか、なあみんな？」

「豪が速人や貴之たちにそう持ちかける。」

「豪に言われるまでもなくオレは協力するぜ。」

速人がそう話す。

「協力してくれるのはありがたいんだが、彩さんの精気ドレインはかなり強烈だぜ。オレも初めて食らったときは気絶したほどだからな。みんなはそこまでの覚悟はある？」

裕也がそうたずねると、

「北方……そこまで話しておいて今さらそういう水を差すようなこと言うかあ？それに、オレたちだって体力にはある程度自信を持ってるから、多少なら大丈夫だろ。」

速人がブーイングを飛ばす。

「まあ、今さら止められるとは思ってないが、一応知らせておくべきだと思っただけ。じゃあ、今日はサークルも休みだし、講義が終わったらみんなうちに行こうか。」

裕也がそういったとき、時計は午後5時の講義開始10分前を指していた。

「ヤバッ！早くメシ食わないと講義に遅れるぞ！」

貴之が時間がないことを指摘し、全員急いで昼食を片づけるのだった。

そして夕方、この日最後の講義はバラバラだったので、終わったあと裕也たちは正門のところで待ち合わせてアヤカシ荘へ向かった。

「……とまあそういうことです。」

彩の部屋で裕也は手紙の真意を説明した。

「本気か？」

彩がそうたずねる。

「こんなことを冗談で言うと思いますか？彩さんの生命にも関わる問題なのに。」

裕也はまっすぐ彩の目を見てそう話す。

「ありがとう。アタシの心配してくれるんだな。それじゃ遠慮なく利用させてもらうよ。とはいっても昨日たっぷり吸ったからしばらくは大丈夫だけだな。」

彩はいつものように豪快に笑いながらそう言い、裕也たちもつられて笑い出すのだった。

## 第21話：裕也の決意と友の優しさ（後書き）

お知らせ

ここまで毎日連載を守り通してきましたが、明日（1/16）以降もしかしたら更新できない日があるかもしれませんのでご了承ください。

できる限り更新していきますが、今後はそういう可能性があるということでお知らせしておきます。

第22話：GW編開幕 妹、来る（前書き）

どうにか今日は更新できた……

## 第22話：GW編開幕 妹、来る

4月29日。ゴールデンウィーク初日の昼間、裕也はテレビを見ていた。何気なくニュースを見てみると、この連休で行楽地へ出かける人の混雑の様子を知らせていた。

「やっぱこうなるのが普通だよな。地元へ帰ろうとしないですよ。たぜ……」

裕也がそうつぶやいたそのとき、「ピンポン」とチャイムが鳴った。

「はい、今開けますよ〜っと。」

裕也がそう返事をして玄関を開けると、

「兄さん、来たよー。」

元氣いっぱいの恵理えりがそう言いながら裕也に飛びつこうとしたが、「ていつ」

「うぎゅっ」

裕也は予測してたのか、飛びかかってくる恵理の額にカウンターで掌底を当ててその動きを制した。

「いたた……兄さん、それが久しぶりに会った妹に対する仕打ち？」

恵理が口を尖らせて抗議の声を上げる。

「久しぶりも何もまだオレがこっちで一人暮らしして1ヶ月だろうが。しかも飛びかかってくるのを放つといたら間違いないオレが倒される。やられる前にやれ、ってことだ。ほれ、さっさと上がるなら上げられ。」

裕也はそんな抗議の声もあっさり斬り捨てると、恵理を部屋に上げさせた。

「それで、先に確認しておきたいんだが、お前はこっちにいつまでいるつもりだ？」

裕也が恵理にたずねる。

「えっと、兄さんの誕生日を祝ってから帰るつもりだから……5月4日に向こうへ帰るつもりだよ。」

恵理はそう答える。

「オレの誕生日か……そっぴいや自分でも忘れかけてたぜ。5月3日でオレ19歳になるんだよな……」

裕也は妹の口から出てきた「誕生日」という一言にハツとしたようにつぶやく。

「ところで兄さん、ご近所さんとは仲良くやってるの？」

恵理が急に話題を変えて裕也にたずねる。

「え？あ、ああ、大丈夫だよ。楽しすぎてこっちに引越してから1ヶ月があつという間だったよ。」

裕也はそう答え、「ちよつと変わった人たちだけれど……」と聞こえないほどの声でつぶやいたつもりだった。だが、

「えっ？ご近所さんって変わった人たちなの？」

しつかりと恵理に聞こえていたようで、目を輝かせて裕也にたずねてくる。

「うお、聞こえてたか？まあ、あまりいいないタイプではあるかな。」

裕也は驚きつつそう当たり障りのないことで済ませようとしたが、

ボンッ、パリン！

裕也の部屋の真下で何かが発音したような音がして床が揺れた。

ついでに真下の部屋から爆発音と同時にガラスが割れて光が漏れていた。

「な、なに今の？」

恵理は突然の爆発音に驚いて裕也の服のすそをつかんでいた。

「ああ、すぐ真下に住んでる真崎 麻美さんだな。この程度の爆発音なら日常茶飯事だよ。たぶん、すぐに事情を説明しに来ると思うよ。」

裕也がそう言った直後、チャイムがなった。

「はいはい、今開けますよっと。」

裕也が立ち上がり、いまだに服のすそをつかんだまま離さない恵

理を引きずったまま玄関のドアを開けると、やはり予想通り麻美が立っていた。しかも服が爆発の際についたと思われるすすで真っ黒になっていた。もともと黒い服なのでそれほど目立たないものの、服の黒さとは違う黒いものがあちこちについていた。

「で、今回は何をやらかしたんですか？」

裕也が慣れたようにたずねると、

「今回は薬の調合をちよつとミスっちゃって、それで大爆発……あら？そちらの方は妹さん？」

麻美が今回の爆発の原因を話したところで、裕也の服のすそをつかんだまま玄関まで引きずられた恵理に気づいて裕也にたずねる。

「ええ、ゴールドデンウィークを利用して実家から遊びに来た妹の恵理です。ほら、挨拶くらいちゃんとしろ。」

裕也がすそから引っぺがして恵理を立たせると、背中を小突いてそう言う。

「えっと、初めまして。恵理です。兄さんがお世話になっています。」

恵理がそう挨拶したとき、

「麻美ちゃん、ここにいたの。また部屋を爆発させて……わかつてるわね？」

雪子、彩、薫も麻美を探していて、裕也の部屋に集結した。

「あらみなさんおそろいで。恵理、ここにいるのでこのアパートのご近所さんはすべてだ。ちゃんと挨拶しておきなさい。」

裕也がまた恵理をせかし、恵理が簡単に挨拶をすると、

「へえ、裕也くんにこんなかわいい妹さんがいたとはねえ……」

彩がそう感想をもらし、雪子たちは「またあとで改めて」とだけいうと、麻美を引きずって裕也の部屋を後にした。

その数分後、アヤカシ荘に毎度おなじみの麻美の絶叫が響き渡ったことは言うまでもない。

## 第22話：GW編開幕 妹、来る（後書き）

GW編開幕、妹の恵理の来訪でどたばた度50%増し（作者脳内比）  
でここからの数話は展開する予定であります。

できるだけ毎日更新できるように頑張っていきます。  
評価・感想などありましたらどんどん書き込んでくださると幸いです。

「裕也と のこんな話が読みたい」などの要望でも構いません。  
もしあったら考えてみます。

第23話：裕也、暴走対策を立てる（前書き）

よし、今日も無事に更新完了つと。

## 第23話：裕也、暴走対策を立てる

麻美の絶叫が聞こえなくなったところを見計らい、とりあえず数日間滞在するなら挨拶くらいさせておこうと、裕也は恵理を連れて他の部屋を回ることにした。

隣の彩の部屋は留守になっていたことからまだ麻美へのお仕置きが続いていると判断した裕也は101号室の雪子の部屋に向かった。「雪子さん、いますか？」

裕也がドアをノックしながらそう呼びかけた直後ドアが勢いよく開き、麻美が飛び出してきた。

「今日はいつになく長くないいいいい!？」

麻美はどうやら隙を突いて逃げ出したらしい。その後をすぐ雪子と薫が追いかけて出て行く。一番最後に出てきた彩が、

「見ての通りまだお仕置き中だ。今回は裕也くん以外の一般人に対して迷惑かけたことできついいお仕置きになってるからもうしばらく待っていてくれ。終わったらこっちから裕也くんの部屋に向向くから、そしたらその子を紹介してくれ。」

そう言っただけで逃げた麻美の行方を追っただけで裕也と恵理は苦笑いしつつ一度部屋に戻るのだった。

「ねえ、兄さん。あの麻美さんって人、いつもあんな感じなの？」

恵理が裕也の部屋に戻ってくるなりそうたずねる。

「ああ、だいたいああやって騒ぎを起こしてはさつきみたいに雪子さん ああ、白い服を着てた人ね にお仕置きされてるって感じだな。」

裕也はこれまでの1ヶ月を思い返すと複雑な表情でそう答えた。

「へえ……本当に変わった人たちなんだね……」

恵理はそう納得すると、黙ってテレビを見始めた。やはり二人の地元とはテレビの基地局が違うので映るチャンネルも全然違っらしく、恵理はしきりにリモコンを動かしてチャンネルを回していた。

と、そこにチャイムが鳴る。

「はい」

裕也が玄関を開けると、

「ちわつす、北方 裕也さんにお届けものです。代金引換で4200円になります。」

宅配便の配達員が小型の箱を持って立っていた。

「兄さん、何を買ったの？」

裕也が荷物を受け取り戻ってくると、恵理が興味津々に聞いてくる。

「ああ、今まで麻美さんたちの暴走に悩まされてきたから、自分の身を守るための道具。」

そう言いながら裕也が箱を開けて取り出したのは、なんとスタンガンだった。

「え！？兄さん、スタンガンを女性に向けるつもりなの！？」

恵理が驚いた顔で裕也を問い詰める。

「ああ、だってあの人たちは」

裕也が雪子たちの正体について話そうとしたとき、チャイムが鳴り、雪子たちがやってきた。

「えっと、恵理さんでしたよね？先ほどは麻美ちゃんが起こした爆発騒動で驚かしてごめんなさいね。」

入って来るなり雪子と彩が頭を下げた。

「わたしは大丈夫でしたからもういいですよ。でも、ちょっとお聞きしたいんですけど、いいですか？」

恵理がもういいと言って二人の頭を上げさせた後でそう切り出した。

「ええ、構いません。なんででしょう？」

雪子が先を促すと、

「先ほど兄が爆発原因をたずねた際、麻美さんと言う方は薬の調合でミスをしたとおっしゃったのですが、いったいなぜあまり広くな

い室内で薬品の調査をしているのか、そしてなぜ爆発するのか、そこが気になりました。」

「惠理はそうたずねた。」

「当然の疑問ですね。その答えを話す前に逆に聞きたいのですが、何を聞いても驚かないでしょうか？」

「雪子は頷くと、惠理にそうたずねた。」

「??よほどのことでなければ驚かないと思いますが、確かなことは言えないですね。」

「惠理は質問の意味がわからず戸惑ったが、そう答えた。」

「それならいいですね。実は私たち4人は人間じゃないのです。いわゆる妖怪、アヤカシと呼ばれる存在と言えば分かりやすいでしょうか？」

「雪子があっさり正体を明かした。」

「へ？」

「惠理は突然すぎる展開にマヌケな声を上げるのがやっとなんだった。」

「まあ、そういうことだ。ちなみに、騒ぎを起こす麻美さんは魔女なんだ。だから、普通の人間であるオレが道具に頼るのもわかるだろ？」

「裕也が横から口を挟み、さっき届いた荷物を正当化しようとした。なるほど、そういうことだったんですね。納得です。」

「惠理も納得し、目の前の現実を受け入れようと決めたようだ。」

「……裕也くん、道具って？」

「これまで黙って雪子と惠理の話聞いてるだけだった薫がそう問いかけた。」

「ちようどいいや、ここで宣言しておきますかね。今日、みんなの暴走に対抗するため、こちらで道具を購入しました。といってもたぶん麻美さんくらいですかね、コイツの餌食になるのは……」

「裕也がそう言って足元に転がっている箱からスタンガンを取り出し振りかざす。」

「電圧は三十万ボルト。並の人間だったら2〜3秒でダウンするよ」

うな電圧です。ま、妖怪にどこまで通じるかは分かりませんが、もう無抵抗に巻き込まれるだけじゃないので。」

裕也が簡単に説明すると、

「ほう、今までにいないタイプだな。今までこのアパートに住んだ人間でアタシらの暴走に巻き込まれたあとはみんなあつという間に出ていった。対抗しようとしたのは裕也くんが初めてだ。その道具がどれほどの威力かは知らないが、お手並拝見と行こうか。」

彩がまるで宣戦布告のような発言をしたので、

「オレのこの道具は暴走を止めるための最後の手段であつて、みんなとケンカするためのものじゃないですから。」

裕也が慌てて補足する。

「話がだいぶそれちゃいましたけど、わたしは5月3日の兄さんの誕生日を祝つて、5月4日までこちらにいますので、それまでみなさんよろしくお願いしますね。」

恵理が話をもとに戻してそう締めくくる。

「ええ、よろしくね。それと、3日は裕也くんの誕生日なのね。それじゃみんなでパーティーといきましょう。」

雪子がそう提案すると、

「賛成ー！」

「……問題ない」

「パーティーは人数が多いほうが楽しいですからね。」

彩、薫、恵理が三者三様の賛成の声を上げ、ここに裕也の誕生日パーティー企画が発足した。

「……そういうのって本人のいないところで話し合うものじゃないのか？」

第23話：裕也、暴走対策を立てる（後書き）

とりあえず自分の身を守るために30万ボルトのスタンガンを購入した裕也。

けど、妖怪に電気ショックって効くのか？

第24話・恵理とともに過ごす日曜日（前書き）

総アクセス数3000の大台を突破！これからもよろしくお願いします。

## 第24話：恵理とともに過ごす日曜日

4月30日、日曜。朝8時。裕也はまだ寝ている。

恵理がすでに起きていてテレビをつけると昨日見ていたチャンネルのせいか、ヒーローもののアニメがやっていた。すぐさまチャンネルを回すと、行楽地がものすごい混雑しているとニュースが伝えていた。そんな状況を横目に見ているにもかかわらず、  
「兄さん、どっか連れてって〜。」

恵理は裕也を揺さぶりながらそうおねだりする。GWの日曜ともなれば、どこも混んでいるのは当たり前なので、裕也は今日一日寝て過ごすつもりだったのだが……

「ねえ〜兄さんってばあ〜。せめて起きてよ〜。」

恵理はなおも裕也の身体を揺さぶって起こそうとする。しかし裕也はまったく起きる様子になかった。

「いい加減に起きてよ〜。起きないとんでもないことしちゃうよ〜？それでもいいの〜？」

恵理がいったん裕也を揺さぶるのをやめると、クローゼットの中においてある3段引き出しの中から危険物スタンガンを取り出す。

「これが最終警告だよ〜。これで起きなければ罰として電気ショックね〜。」

何気に怖いことをさらつと云つてのける恵理。当の裕也は、

「むにゃ……………今日は日曜で学校休みだろ……………もっと寝かせてくれよ……………」

と寝言を言うつとそのまま寝てしまった。

「もう、いつまで寝てるの!? さつさと起きろ〜!!」

恵理は裕也の布団を引つpegすと、足の太ももに危険物スタンガンを押し当て、放電スパークさせた。

「ぐぎゃあああああああああ!？」

裕也の身体を30万ボルトの電圧が駆け巡り、裕也は一気に目を

覚ました。

高圧電流をまともに食らい、裕也はしばらく起き上がれなかったで、ようやく動けるようになってきたところで、

「ったく、起きなかつたオレも悪いかもしれないけど、だからってスタンガンはどうなのさ？これは昨日説明したとおり、対アヤカシ専用最終兵器にするものであって、生身の人間に対して使うものじゃないの。わかつた？」

裕也は恵理に説教していた。

「ちよつとやりすぎだつたね、ゴメン。」

恵理は素直に謝ると、

「ねえねえ、せっかく新潟から上京してきたんだからどっか連れてつてよ。」

改めて自分の要求を突きつけた。

「おいおい……こんな混雑してるなかに行きたくないっての。お前は4日までこつちにいるってことは明日や明後日の平日も学校休んで来たんだろ？なら平日に行けばいいだろう。オレのほうは明日、明後日ともに最初から大学が休みだし。」

裕也が妥協案を提示すると、

「明日ならどこか連れてつてくれるの？じゃあ今日は我慢する。」

あつさり恵理は引き下がり、ひとまず朝食をとることにした。

「ところで兄さん、コンビニとドラッグストアって近くにある？」

食後、恵理がふと裕也にたずねる。

「コンビニは大学を挟んで反対側にある女子寮の前、ドラッグストアは駅前になかつたか？」

裕也がそう答えると、

「ああ、あそこにあつたのが一番近いのか……都会とはいえそれほどたくさん店があるわけじゃないんだ……とりあえず買いたいものがあるから出かけてくるね。兄さんはなにか買ってきてほしいもの

ある？」

恵理はそう言って出かけていこうとした。

「そうだな……やっぱ一緒に行こうか。なにか飲みたいんだけど、決まらないから店に行って考える。」

裕也はそう言つと、急いで着替え、恵理と一緒に買い物に出かけるのだった。

買い物だけとはいえ、裕也と一緒に出かけることができた恵理はその日一日中ご機嫌だった。

第25話：恵理と遊びに…… 前編

5月1日、月曜。GWの谷間と言われる平日。地元の高校をサボって遊びに来ている恵理と大学が休みの裕也は二人で出かけることにし、少し早い時間に出発した。

そんな二人を物陰から見守る二つの集団。

「こちら麻美、ターゲットがポイントを通過、これより追跡を開始します、どうぞ」

「こちら彩、了解。行き先がわかったらまた連絡求む、通信終わる。」

ひとつはやはりというか、アヤカシ荘メンバーだった。そして

「あ、麻美さんと雪子さんじゃないですか。何をやってるんですか？え？裕也たちの追跡？奇遇ですね、オレたちも目的は同じなんですよ。ヒマだから遊びに来たら裕也が女の子と仲よさそうにアパートを出て行くんだもの。これは追跡しない手はないだろうということです。」

通信を終えた麻美の肩を叩いて声をかけたのは速人、豪、貴之の3人だった。

「なるほど、目的は同じってことね。それなら一緒に行きましょう。ちなみに、あの女の子は裕也くんの妹さんよ。GWを利用して遊びに来たんだって。」

麻美はそう言って速人たちと一緒に裕也たちの追跡を始めた。

「それで、どこに行きたいんだ？」

裕也が駅へ向かいながら恵理にたずねる。

「んーとね、遊べるところならどこでもいいんだけど、ここから近くて遊べるところってある？」

恵理が逆にたずねてきた。

「近くて遊べるところか……近くにはあまりあてがないし、ちょっと遠出になるけどお台場のほうにでも行くか。」

裕也がそう提案すると、

「あつ、そこでもいいよ。そんなじゃ、れつつらごー!」

恵理がつれしそくに裕也の手を引っ張り駅へ向かって走り出すのだった。

「ちょ、恵理、引っ張るなって!!」

「こちら麻美、ターゲットはお台場方面へ向かうとのこと。どうぞ。」

「……こちら薫、了解。こちらもすぐに合流する、どうぞ。」

「了解、じゃこの後は携帯でね。通信終わるつと。」  
「今まで古くさい無線通信を使っていたらしいアヤカシ荘メンバー。裕也たちの目的地がわかったところで通信を終え携帯に切り替えるらしい。」

「それなら最初から携帯を使えばよかつたんじゃ……」  
速人がぼそつとつぶやいた。

「こつこつには雰囲気とノリが大切なの!」

ツッコミが凶星だったらしく、麻美は少し怒りながら叫ぶ。

「麻美ちゃん、あまり叫ぶと気づかれちゃうよ。」

雪子があわててなだめる。

「ん?」

裕也が恵理に引っ張られつつも不意に後ろを振り向いた。

「どうしたの、兄さん?」

恵理も一度立ち止まり裕也にたずねる。

「いや、後ろのほうで麻美さんっぽい声が聞こえた気がしたんだけ

ど、気のせいだよな。まさか後をつけてきてるなんてあるわけないし。」

後ろに誰もいないのを確認すると、裕也はそう言って再び歩き出した。

「ふう〜、あぶなく見つかるどころだった……」

さすがに落ち着いた麻美がそうつぶやいたころ、裕也と恵理は駅に入ってしまった。

「雪子さん、それじゃ、先行隊として頼むわね。わたしは彩さんたちを待つて、それから現地で合流するから。」

麻美がそう言つて、麻美以外の4人は裕也たちを追つて駅に入つていった。

「……恵理。やっぱりつけられてたみたいだ。しかもクラスメートの速人たちまでいやがる。」

電車に乗つた直後、裕也が早くも疲れた顔をして隣の車両を小さく指差しながら恵理に話しかける。

「あ、ホント、雪子さんだ。雪子さんがいるつてことはきつと他の人もどこかにいるつてことだよな。」

恵理もそう気づき、「どうする?」と裕也にたずねる。

「次の駅で、ドアが閉まる直前に飛び降りて別の路線に乗り換える。いいな?それと、目的地もお台場から上野に変える。それで振り切れるはず。」

裕也は恵理にそう耳打ちし、恵理も「わかった。」とだけ答える。次の駅に到着し、多少の乗り降りがあった後、ブザーが鳴り響き、ドアが閉まりかける。

「いまだ!」

裕也は叫ぶと、恵理の手を引っ張り列車から降りる。速人がそれ

に気づいたときにはもう扉は閉まり動き出していた。

「しまった、気づかれたか……雪子さん、どうします?」

速人がたずねたときには雪子はすでに麻美にメールを打って追跡がバレたことを伝えていた。

すぐにメールが返ってきて、

<いま彩さんたちが合流、そちらも一度電車を降りて待ってて。どうにか行き先を特定できないかやってみるから。>

と書いてあった。

その指示に従い、雪子たちは裕也たちが降りた駅の次の駅で降りて待機することにした。

「どうやらうまく撒いたようだ。まったく、兄妹水入らずな状況を邪魔するなって感じたぞ。」

裕也が苦笑いしつつそうつぶやく。そこに麻美からメールが入った。

<妹と二人つきりになって、しかも追跡を撒くなんていかがわしいことをする気じゃないでしょうね?>

裕也はすぐに、

<そんなことあるわけないでしょう、ただ遊びに行くだけです>

と返した。だが、これがアダになった。

<今の返信で現在位置をつかんだわ。もう隠れてついてったりしない。すぐに先行隊に伝えて追いかけていくから覚悟しときなさい二人つきりなんてそんなおいしい状況にはさせないわよ>

と返ってきた。

「……現在位置をつかんでも行き先がわからなければどうしようもないじゃん……」

裕也はそうつぶやくと、恵理を連れてさらに行き先を変更し、地

下鉄に乗り換えるのだった。

第25話：恵理と遊びに…… 前編（後書き）

果たして裕也たちは二人っきりで遊ぶという目的を達成できるのか？

第26話：恵理と遊びに…… 後編（前書き）

なんか25話のノリがすべった気がしたので追加でもう1話分れっ  
つらごー（笑）

ってか、25話のときに気づかなかったけど自分の連載の最高話数  
超えてるじゃん！（これまでの最高は『ツイン・オブ・エスパー』  
の24話）  
まだまだ続いていきますので今後ともこの作品をよろしく願いま  
す。

第26話：恵理と遊びに…… 後編

地下鉄やらJRやら派手に乗り換えるだろうことを考慮し、途中で1日乗り放題の切符に切り替えて移動を再開した裕也たちは、最終的に住んでる街から2駅しか離れてない水族館に来ていた。

「恵理、すまん。こっちでいろいろ面白い物とかもしたかったら？」

裕也が水族館のチケットを2人分買いながら恵理にそう言って謝る。

「ううん、別にいいよ。私は兄さんとどこかに遊びに行きたかっただけだし。」

恵理は首を振ってそう言った。

「まあ、余計なおまげが数名いるのもうこの際きれいさっぱり忘れて夕方まで楽しもうか。」

裕也は後ろの物陰に隠れてるつもりを追跡者たちに聞こえるようにわざと大きめの声で「余計なおまげ」の部分を強調して嫌味っちらしく言ってる。

「まあまあ、気にしなればそれでいいんだから。」

恵理はそう言って裕也をなだめるが、

「まあいいけど、もし邪魔するようだったらコイツの出番かもな。兄妹水入らずを邪魔するヤツは容赦しねえ。」

裕也は懐からスタンガンを少し覗かせると、怒ったように言った。「に、兄さん……それはさすがにやりすぎじゃ……」

恵理も驚いて苦笑いするしかない。と、裕也が後ろの物陰に駆け寄り、まず速人を、続けて芋づる式に他の追跡者も発見し、

「聞こえてたと思うけど、この先オレたちの邪魔したらコイツが黙ってないからな。お前らはお前からで遊んでくれ。」

裕也はスタンガンを覗かせつつ不機嫌そうにそう言い放った。

「北方って実はすごいシスコン……いやそんな言葉で収まるものじ

やないかもしれぬ……」

貴之が一言つぶやき、

「う、うるせえ！シスコンのどこが悪い！だがひとつ言っておくと、オレはどこぞのゲームやらマンガみたいに妹に恋愛感情を持つことはないからな！誤解すんじゃねえぞ！」

裕也は水族館の往来と真ん中でシスコンを認めてしまい、急に恥ずかしくなったのか、くるっと速人たちに背を向けると、奥のほうへ走り去っていき、恵理があわてて「兄さん、待ってよー」とか言いながら追いかけていった。

「……帰るか。なんか追跡する気が失せた。」

裕也が走り去ったあと、しばらくして速人がそうつぶやいた。

「そうだな。あそこまではつきりとシスコン宣言されちゃあな。」

豪が同意し、速人、豪、貴之の3人は引き上げていった。

「ま、それじゃアタシらも普通に遊ぶか。」

アヤカシ荘メンバーも彩がそう提案し、特に反対意見も出なかった。たので普通に水族館を見て回るために歩き出した。

その後、裕也たちは普通に水族館を回り、イルカのショーを見たりして存分に楽しみ、日が暮れるころ水族館を出た。

「さ、帰ろうか。1日の半分近く逃げ回っていたような気がするから疲れたよ。帰ってメシにしよう。」

裕也がぐったりとした表情で恵理にそう言う。

「そうだね。でも逃げ回るのも結構楽しかったよ。ところで兄さん、こっちで彼女とかできそう？」

恵理がいきなりそんなことをたずねる。

「いたら今日こんな風にお前と出かけてないって。まだまだ彼女いない暦。年齢の寂しい記録は続いていくだろうな。」

裕也は苦笑いしつつそう答えた。

「そっか。男の一人暮らしって寂しいよね。早く彼女できるといいね。」

恵理がそう励ます。

「そういうお前こそオレの心配なんかしてないで早く彼氏の一人くらい作れよな。」

裕也もお返しとばかりにそんなことを言ってみる。

「ん？もう私は彼氏いるよ。兄さんが上京してから告白されて付き合うことになったから知らなかったよね。」

恵理の口からさらっと衝撃発言が飛び出す。

「え？そうだったのか。そいつはよかった。でもそれなら彼氏を置いてこつちに遊びに来てていいのか？」

裕也が心配そうに聞くと、

「うん、大丈夫だよ。彼、トモヒロくんって言うんだけど、『自分から告白してお付き合いさせてもらってるから』、って言っただけであとはなにも言わずに送り出してくれたの。」

恵理は満面の笑みでそう答えた。

「へえ、トモヒロ君っていいやつなんだな。それじゃ妹に負けてらんないな。オレもいい人見つけないと。」

裕也は恵理に彼氏ができたことを祝福しつつ、自分もそういう人を見つけようと心に誓い、二人仲良く歩いていった。

第26話・恵理と遊びに…… 後編（後書き）

えー、先に言っておきますが作者はシスコンではありません（笑  
そのところ、ご了承ください。

第27話：すっかり忘れていたキャラクター設定追加版（前書き）

前に2話のあとがきでキャラが増えたらまた設定載せるって言ったのにすっかり忘れていたアホ作者なのでした〜

## 第27話：すっかり忘れていたキャラクター設定追加版

ここらで一度キャラ設定を整理しようと思います。2話のあとがきで紹介した主要キャラももう一度。

・北方きたかた 裕也ゆうや…主人公。18歳。（28話で誕生日イベントをやつて19歳になる）大学入学を機に新潟から上京し、流星荘（アヤカシ荘）へやってくる。190cm、75kgと恵まれた体格で、体の丈夫さだけがとりえ。また、心臓に毛が生えていると言われるくらい、少々のことでは動じない精神的な強さを併せ持つが、被害を未然に防ぐため自衛手段としてスタンガンを購入。また、ひとつ年下の妹がいる（後述）

・白崎しろさき 雪子ゆきこ…アヤカシ荘101号室の住人。雪女。人間の年齢で23歳（実年齢189歳）。スリーサイズは上から85・56・81（本人談）。おっとりしているが、いたずらをした麻美のお仕置き役を担当。

・石崎いしざき 薫かおる…アヤカシ荘102号室の住人。ゴーゴンorメデューサーと呼ばれる妖怪。人間の年齢で22歳（実年齢154歳）。スリーサイズは上から79・59・80（本人談）。普段は非常におとなしく、話し声も耳を澄まさないと聞こえないほど。ただし一度怒らせたなら怖い。

・真崎まさき 麻美あさみ…アヤカシ荘103号室の住人。魔女ウィッチ。人間の年齢で25歳（実年齢256歳）。スリーサイズは上から80・58・82（初公開）厳密に言えば妖怪とは違うが誰も気にしていない。ここの妖怪たちの中では一番のいたずら好きで、通行人に魔法でいたずらを仕掛けて楽しんだりしている。あまり害はないので他の住人たちもほったらかしにしている節がある。が最近はいよいよちゅ

う雪子にお仕置きをされている。

・盛野もりの 彩あや：アヤカシ荘202号室の住人。サキユバス。人間の年齢で26歳（実年齢156歳）。スリーサイズは上から95・54・97（本人談）。裕也たち男から見たらかなりのナイスバディで、よく街でナンパされる。ナンパした男の末路は想像に任せるということで、ノーコメントらしい。月に最低でも一度は男性から精気を吸わなければ生きられないことが発覚し、裕也や速人たちが協力することになった。

・築地つきじ 速人はやひ：裕也が大学で出会ったクラスメートの一人。18歳。出身は東京。スポーツとかより女性を追いかけることに情熱を燃やす健全な男で、親睦旅行では2日続けて女子風呂を覗こうとし、いずれも雪子たちの活躍で未遂に終わった。いつか完璧に覗きを達成してやると息巻く彼だが、裕也たちは逮捕されないかハラハラしているらしい。

・浅田あさだ 豪こう：速人と同じく、裕也のクラスメート。18歳。やはり彼も健全な男で、速人と一緒に覗きをやろうとし、速人と運命をともにした。

・田野口たのぐち 貴之たかゆき：同じく、クラスメート。18歳。こちらはスポーツに青春をかけるタイプで、卓球が得意。親睦旅行の際には裕也と死闘を繰り広げた末に敗れた。リベンジを狙っているらしいが

・小笠おがさ 賢けん：同じく、クラスメート。18歳。特に活躍してないので割愛。

・斉藤さいとう 靖やすし：同じく、クラスメート。18歳。賢と同じく特に活躍してないので割愛。

・井上<sup>いのうえ</sup> 智子<sup>ちこ</sup>…同じく、クラスメイト。18歳。千葉出身の女の子。卓球が得意で、親睦旅行で裕也と死闘を繰り広げた。その際裕也の必殺サーブ「ジャックナイフ」で服を切られたりし、最後のほうではそのサーブの技術を盗み逆襲を狙うが返り討ちにあって敗北。やはりリベンジを狙っているらしいが

・宮本<sup>みやもと</sup> 静香<sup>しずか</sup>…同じく、クラスメイト。18歳。智子と同じく卓球経験者で、語られなかったが、親睦旅行の際には智子と死闘を繰り広げて結局決着がつかなかったらしい。

・福田<sup>ふくだ</sup>…聖都大3年、21歳。裕也、貴之、智子、静香が所属する卓球サークル《ピンポン・スマッシュャーズ》を率いる現会長。サークル内では実力ナンバー2。

・宮田<sup>みやた</sup>…聖都大3年、21歳。《ピンポン・スマッシュャーズ》副会長にして実力ナンバー1。実力はあるのに会長をやらないのは本人いわく「めんどくさいから副会長でいい」ということらしい。

・北方<sup>きたかた</sup> 恵理<sup>えり</sup>…新潟県内の県立高校に通う高3、17歳。裕也の妹。中学のころよりモテモテだったが、裕也が地元に行ったころは兄である裕也にべったりだった。その兄が上京してしまったことでひとつの区切りがつき、ちょうど告白してきた男子の顔が好みだったのもあり、晴れて彼氏持ちとなった。

## 第27話：すっかり忘れていたキャラクター設定追加版（後書き）

てなわけで26話までに出てきたキャラの大半は網羅できていると思います。

しかし、作者も忘れているような細かいキャラで設定が見たいなどありましたらお知らせくださるとありがたいです。（ただし、親睦旅行の際にアルファベットで表記した女子はなしという方向でお願いします）

第28話・Happy Birthday(前書き)

3500Hit突破!まだまだ頑張ります!

## 第28話：Happy Birthday

5月3日。裕也は朝から駅前をぶらついていた。というのも恵理が、

「兄さん、誕生日おめでとう。パーティーの準備を麻美さんたちとやるんだけど、準備ができるまで外で時間潰して欲しいな。どんな演出するかはこれから考えるんだけど、やっぱり驚いてほしいから……」

そう言つて裕也を部屋から追い出してしまったからだった。

「ヒマだし、本屋で立ち読みでもするか……」

そうつぶやき、駅前の本屋で雑誌などいろいろ立ち読みをして時間を潰すのだった。

結局、本屋だけでは時間を思うように潰せず、近くにある漫画喫茶なども活用して時間を潰していた裕也に恵理から連絡が入ったのは夕方5時を回ったころだった。

（家を追い出されたのが朝の9時だから8時間もかけてパーティーの準備してくれたのか……）

裕也がそう思いながらアパートに帰ると、外観からして変化があった。

（あれ？アパートってこんなに大きかったっけか？）

裕也は目をこすつてもう一度見てみるがやはり今まで見ていた建物の2倍近くはある。

（ああ、麻美さんがまた何かやったのか。）

麻美の仕業ということで納得し、2階にある自分の部屋の玄関を開けると、

「ハッピーバースデー、裕也くん」

恵理、それと雪子たちアヤカシ荘の住民はわかるとして、誰が知らせたのか、速人や豪、貴之のほか、智子や静香までやってきてい

た。

「みんな……よくこの狭い部屋に……って広くなってる!？」

裕也が玄関から中を見ると、今までの6畳1DKの間取りが、20畳くらいある部屋に変わっていた。

「パーティーやるなら広い部屋がいいから、今日限り全体を改造しちゃいました」それに、こんなにたくさんの人が来るんだから、もっと広くてもいいくらいだよ。」

麻美が胸を張ってそう言い、裕也たち一般人は「魔法ってホントすげえ」などと心の中で思うのだった。

料理が出てきて食べ始めようとした一同だったが、ふと裕也が、  
「ところで今日のこの豪華な料理は誰が作ったんです？」  
とたずねると、

「私と、麻美さん、雪子さんの3人だよ。」

恵理がそう答えた。

「そっか。麻美さん、変なもの入れてないでしょうね？」

裕也は一度箸を置き、麻美をじと目で見つめた。

「それは大丈夫よ。妙なことしないようにちゃんと見張ってたから。」

雪子が太鼓判を押し、「それなら大丈夫か」と裕也が安心して食べ始めた。

「うっ……わたしそんなに信用ないの？」

麻美がぼやき、一同同時に笑い出した。

そんな感じでにぎやかに裕也のバースデーパーティーは過ぎていき、速人たちクラスメートの連中は帰っていった。

「こんなににぎやかなパーティーやってもらったらみんなの誕生日のときが大変だなあ……あれ、そういえばみんなは誕生日いつなんですか？」

裕也がそつたずねた結果、雪子が1月11日、薫が3月15日、

麻美と彩は年こそ違うが同じ10月31日という答えが返ってきた。「よし、それじゃあそのときはちゃんとパーティーしなくちゃな。」裕也がお返しのつもりでそう言うと、

「裕也くん、私たちはパーティーはやらなくていいわ。だって、もうパーティーとかやってもらうような年じゃないもの。」

雪子がそう笑顔で辞退する。

「え？だって4人とまだまだ20代……」

裕也がそう言いかけたが、

「それは人間の年齢に直した場合の話。妖怪や魔女はものすごい長生きだから人間で言うくと20代でも実年齢は4人と150〜200歳は軽く超えてるわ。特に麻美ちゃんなんかもう256歳だったかしら？だからもう誕生日とかだってあっても意味ないの。わかってくれたかしら？」

雪子はその言葉をさえぎってそう言葉をつなげた。

「そうか、そうですね。あまりに見た目が若いから忘れてましたよ。」

裕也も納得したところで、後片づけを始めようとしたが、

「兄さん、主役は黙って座ってればいいの。」

裕也が片づけを手伝おうとしたら恵理にそう言って止められたので、裕也を除いた5人で後片づけをし、大きくしていた部屋のサイズも元に戻したのだった。

第28話・Happy Birthday(後書き)

GW編も残すところあと1話

## 第29話：GW編最終話 恵理、帰る

5月4日。恵理が帰る日が来た。

「忘れ物はないか？」

着替えなどをバッグに詰め込み、玄関に出てきた恵理に見送りに行く裕也がたずねる。

「うん、大丈夫だよ。」

恵理がそう答える。

「よし、それじゃ行くこうか。東京駅まで一緒に行くよ。」

恵理のバッグを持ってやり、裕也がそう言った。

「うん、ありがとう。」

恵理がそう言っつて、2人は歩き出した。

裕也の暮らす街の駅から東京駅まではおよそ30分かかるのだが、その間2人は特に何も話さなかった。

東京駅で新潟行きの新幹線の自由席のチケットを買い、2人はホームにいた。

「それじゃ、兄さん、またね。」

発車が近いことを告げるアナウンスが流れたところで恵理が裕也からバッグを受け取り、列車に乗り込む。

「あ、恵理。帰ったら母さんに伝えておいてほしいことがあるんだけど、いいか？」

デッキに立っている恵理に裕也が話しかける。

「うん、いいよ。何？」

恵理が先を促すと、

「あのさ、GWは帰らなかつたけど、夏休み、お盆の時期には帰る

から心配するなって。オレは元気にやってるよってことを伝えてほしいんだ。」

裕也はそう話した。

「うん、わかった。あ、もう発車の時間ね。それじゃ、夏休みに帰ってくるのを待ってるね。そうそう、もしできてたら彼女同伴でもオッケーよ。」

恵理が冗談まじりにそう言ったところでドアが閉まり、ゆっくりと動き出した。

(つたく、ひと言多いんだよ……)

裕也は列車が見えなくなるまでホームで見送り、帰路についた。

(さて、GWあけたら大会が始まるって福田さんが言ってたし、そろそろ気持ち切り替えていかないとな。)

また、別の意味で騒がしい日々が始まるうとしていた……

**第29話：GW編最終話 恵理、帰る（後書き）**

半端に次の話に入るとまた無駄に長くなるので今回は短いですがここで切ります。

### 第30話：夏休みは目前、でも遊ぶ前には試練が待っている

夏休みを目前にしたある日、裕也とクラスメートたちは裕也の部屋で勉強会を開いていた。

「もうすぐ前期試験かあ……めんどくせえ……っーかこの部屋暑くない……」

速人が勉強が暑さで勉強がはかどらないと嘆く。

「そりや仕方ねえだろ、6畳1DKの狭い部屋に8人も入れれば暑苦しいっての。しかもクーラー壊れたし。」

裕也がそう言ったとおり、今この部屋には裕也、速人のほかに豪賢、貴之、靖といつものメンバーだけでなく、智子と静香まで来ていた。

さらに悪いことに、この部屋にはクーラーがついているのだが、つい最近壊れ、現在は修理中だった。

「そついや全然話違うけど、大会は惜しかったよな。なあ裕也？」  
速人がまったく関係のない話を振ってきた。

「ああ、あと少して全国行けたのにな……クソッ、あそこでオレが転ばないで勝ってれば全国だったのに……」

裕也はGW明けから卓球の大会に出ていたのだが、そのときのことを思い出して悔しかった。

関東大会準決勝、ここを勝ち抜けば個人、団体ともに全国への道が開ける重要な試合。裕也たちはまず個人戦で戦い、福田と宮田が準々決勝で敗退（ベスト8）、貴之はベスト16、智子と静香はともに女子ベスト8で敗退して悔し涙を流した。そして裕也だけはベスト4に残り、準決勝はファイナルセットにまでもつれ込む激戦となったが、最後は相手のサーブを返した瞬間に床が滑るという不運に見舞われた結果、足をくじいてしまい、最後まで力を出し切れ

ず敗退した。一方団体では男女混成チームを結成し挑んだが、うまく機能せずにベスト8で敗退した。

「ついつい思い出話にひたっている間にいつの間にか夕方になっていた。」

「おっと、もうこんな時間か。ついでだ、みんなメシ食ってくか？」

裕也が時間を見ると夕方6時を回ったところだった。

「お、いいのか？」

速人がたずねると、

「ああ、たまにはにぎやかに食べるのもいいだろ。たいてい一人で食ってるからな。たまに雪子さんや麻美さんとかが食べにくるけど。」

裕也はそう笑顔で話した。

食後、少し涼しくなってきたので裕也たちは勉強を再開し、午後9時を回ったあたりでお開きにしてみんな帰ると言い出した。

「井上さんと宮本さんはここから家は近いっけ？」

裕也がそうたずねると、

「私たちは学生寮だからここからそう遠くないよ。」

智子たちはどうやら2人とも寮暮らしらしい。

「そう遠くないとはいえ夜遅いし、ここら辺は不審者が出たこともあるから、送っていくよ。」

裕也がそう申し出ると、2人は快く了承した。

3人はあまり話さず裕也のアパートから大学を挟んで反対側にある女子専用学生寮の前に到着した。

「それじゃ、私たちはここで。ありがとね、裕也くん。」

智子がそう礼を言って二人は建物に入ってしまった。

「へ？今オレのこと名前で呼んだ？さっきまで北方くんだったのに、

どつなってるんだ？」

裕也は首を傾げつつ来た道を引き返してアパートに戻るのだった。

**第30話：夏休みは目前、でも遊ぶ前には試練が待っている（後書き）**

あと何話が未定ですが、ここから始まる夏休み直前～夏休みのお話  
で完結させます。

最後までお付き合いくださると幸いです。

第31話：海岸の恋物語！？（前書き）

毎日更新がついに途切れました。それを目当てにしていってくださった方々申し訳ありませんでした。

### 第31話：海岸の恋物語！？

「おっしゃー、終わった〜！」

試験の最後の科目が終わり、外に出た瞬間速人が叫ぶ。

「いちいち怒鳴るな、うつつうしい。」

貴之が疲れた顔でそう言った。

「まあ、なんにせよこれでようやく夏休み突入だな。みんなは夏休みどうするの？」

裕也がそうたずねると、地元暮らしの速人と靖以外はお盆に合わせて実家に帰るらしい。

「じゃあさ、お盆に入る前にみんなで海にでも遊びに行こうよ。もちろん雪子さんたちも誘ってさ。」

智子がそう提案する。

「お、いいね〜。じゃあオレは雪子さんたちに都合のいい日を聞いておくよ。」

裕也はそう言うと、「じゃあオレはあっちだから」と言ってアパートのほうに歩いていった。

「え？みんなで海に？私たちも一緒に？」

雪子はそう聞き返した。

「そそ。大勢で出かけたほうが楽しいでしょ？」

裕也がそう言って誘う。

「それじゃあご一緒させてもらいましょうか。彩さんや麻美ちゃんもみんな行くわよね？」

雪子たちも了承し、早速今週末に千葉の海水浴場へ行くというこ  
とで話がまとまった。

あつという間に時間は過ぎていき週末になった。

誰も車の免許を持っていないため電車で出かけることになり、それぞれ駅に集まっていた。

「よし、それじゃ、しゅっぱーっ！」

朝からテンション高めの女性陣に引きずられるような形で裕也たちは出発した。さすがに電車の中では静かにしていたみんなだったが、2時間ほど電車を乗り継いで海岸が見えた瞬間、

「おお〜！泳ぐぜ〜！！！」

行くときは意外と静かだった速人が一気にテンションを上げて走り去り、それに続くように裕也と智子以外みんな追いかけていつてしまった。すっかり出遅れた形となった裕也と智子は顔を見合わせ苦笑いすると、ゆっくりみんなの待つ海岸へ歩き出した。

「ねえ、裕也くんって彼女とかいるの？」

歩きながら不意に智子が裕也にたずねる。

「いや、こついうと空しい気もするが年齢〓彼女いない暦だよ。」

裕也がそう答えると、

「じ、じゃあ私が彼女候補に立候補してもいいかしら？あの温泉卓球の時に服を破かれたほうとしては責任とって欲しいかな〜なんてね。」

智子が冗談とも本気ともつかないことを裕也に告げる。

「井上さん、それは冗談とかからかい抜きで言ってくれてる？」

裕也もやはりいきなりすぎて冗談と受け取ったのか、そう聞き返す。

「裕也くんはどつちだと思っ？」

智子は意地悪にもそう聞き返す。

「うーん、半々だな。本当であつてほしいけど今ひとつ信じきれない。」

裕也はそう答える。

「じゃあ、こうしたらどうかかな？」

智子は荷物をその場に投げ捨てると、不意打ちのような感じで裕也にキスをした。

「え　　じゃあ……」

突然のことに驚いて絶句する裕也に対し、

「裕也くん、好きです。私と付き合ってください」

智子の告白が海岸に響き渡った。

「うん、こんなオレでいいなら。井上さん、いやこれからは智ちゃんって呼んだほうがいいか。」

裕也がOKの返事を出し、晴れて二人はカップルとなり、ともに海を満喫するのだった。

**第31話：海岸の恋物語！？（後書き）**

ついに裕也にも遅い春が来た。  
次回、ついに最終回！

## 最終話：エピソード

その日1日海を満喫した裕也たちは帰りの電車の中である意味バカップルみたいになっていたので速人や雪子たちにも知られてしまい、からかわれることになった。

それから2週間ほどが過ぎたころ、一度実家に帰るために荷物をまとめ、裕也は女子寮の前に向かった。

GWが終わるときに恵理が言っていたことを実行するわけではなかったが、裕也がお盆は実家に帰るといったところ、じゃあ私もついていきたいと智子が言い出し、二人で新潟へ向かうことになったのだ。

裕也が女子寮の前に到着すると、ちょうど智子が寮から出てくるところだった。

「それじゃ、行こうか。」

裕也がその声をかけ、智子は「うん」と一言頷くと裕也と一緒に歩き出した。

「まったく、若いっていいわよね。」

裕也たちの様子を見ていた麻美が呆れたようにそうつぶやいた。

「そうね。帰ってきたら思う存分からかってあげましょうか。」

くすくすと笑いながら雪子がそう話す。

「それって雪子公認でいたずらし放題ってこと？」

麻美がそうたずねると、

「常識の範囲内なら今回は止めないし、咎めないわ。」

雪子がその条件をつけて麻美にいたずらを認めた。

「んっふっふっ、どんないたずらを仕掛けようかな。早く裕也くん帰って来ーい。」

電車の中で裕也は突如寒気を感じ身震いした。

「どうしたの？」

突然震えた裕也に対し智子が心配そうに聞いてくる。

「いや、急に悪寒を感じてね。もしかしたらアパートのほうで何か企んでるかもしれないな……」

裕也はそう話すと、額の汗をぬぐった。

「そっぴや寝ちまつてたのか……智ちゃん、いまどの辺にいる？」

裕也がたずねると、

「もうすぐ東京駅だよ。そろそろ起こそうかなって思ってたところ。」

智子はそう答え、降りる準備を始めた。

その後新幹線を使い新潟に到着した裕也たちを待っていたのは、迎えを頼んでおいた親と、おまけでついてきた恵理の2人だった。

「兄さん、久しぶりー！」

恵理がそう言って飛びつこうとするが、

「ていつ」

「うぎゅっ」

GWにやったのと同じ方法で裕也は撃退した。

「いたた……相変わらず容赦ないなあ。」

恵理がそう抗議すると、

「あのなあ、お前だってもう彼氏いるんだし、オレだって見ての通り彼女できたんだ。もう昔みたいに飛びついてくるのやめろって。」  
裕也はそう言って智子を紹介する。

「えっと、井上 智子です。って、恵理さんは知ってるわよね。GWに一度会ってるから。」

智子がそう挨拶すると、

「ええ、でもまさかあれから3ヶ月で彼女に発展してるなんて思い

ませんでしたけど。」

恵理も驚いてそう話した。

「さて、結構暑いことだし、そろそろ家のほうに向かわないか？  
車を運転する裕也の父が車のエンジンをかけてそう言った。

「そうだな。いつまでも立ち話してるのもなんだし、行こうか。智  
ちゃん、荷物貸して。」

裕也は頷くと、智子から荷物を受け取り、自分の荷物と一緒にト  
ランクに詰め込む。

「それじゃ、父さん、出発していいよ。」

「ああ、わかった。」

みんな乗り込んだのを確認し、車は走り出した。

（まだ大学生活は始まったばかり。この先何があるかわからないけ  
ど、きつと大丈夫だよな。）

裕也たちは東京に戻ったあと雪子たちアヤカシ荘のメンバーや速  
人たちクラスメイトによって様々な面倒ごとに巻き込まれて行くの  
だが、それはまた別の話。

完

## 最終話：エピソード（後書き）

中途半端かもしれませんがここで終わりとなります。

自分史上最長となる30話を超える長い話に付き合っていたいただいた方々に深く感謝してこの物語を終えたいと思います。

また、遅ればせながらネット小説ランキング（現代コミカル部門）に登録しました。

投票していただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3334b/>

---

アヤカシ荘の人々。

2010年10月8日14時45分発行